
伝説とメダルと魔法～新たな戦い

アニメ冒険家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説とメダルと魔法〜新たな戦い

【Nコード】

N4569R

【作者名】

アニメ冒険家

【あらすじ】

ある少年があるメダルを拾う事で新たな戦いが火蓋が切って落とされた。伝説やメダル、魔法が入り乱れて、今歴史最大の戦いが始まる。

始まる伝説（前書き）

新連載です！アニメ冒険家を知らない人も知ってる人も呼んで下さいね！！

始まる伝説

「なんだ…これ？」

ある日、ある場所で少年はメダルを拾った。赤く輝いている綺麗なメダルだ。

「金にしては大きなメダルだな…まあ拾った物は俺の物…とりあえず貰っておくか…」

少年は拾ったメダルを自分の懐にしまった。そんな少年の名前は、まっぼら松原 しんく司紅普通の高校に通って生活をしている高校一年生である。

「さて…腹も減ったし、そろそろ家に帰るか…」

司紅は背伸びをすると、腹の音を鳴らして歩きだした。もう空には真っ赤な夕陽が登っていた…

しかし、これから少年の全てが変わっていく…一つのメダルから…。

「え？…地球で異変？」

「そや…何だかよんわからんけど…上の情報でそう言う事になってるらしい…」

とある場所。広いオフィスのような場所で三人の女性が話していた。

4

「それで私達が調査に？…もしかして機動六課の実習期間が伸びた理由って…」

「うん…それが理由や…機動六課はこれより…地球の調査に向かいます…」

今また一つ新たな物語が生み出されようとしていた。

始まる伝説（後書き）

まあまだ始まりは短いです。何時も事です！
また見て下さい（＾Ｏ＾）

メダル1 (前書き)

新たに戦いの火蓋が切っていきます！
始まったばかりですが、よろしく願います！

メダル1

「くそ！なんだこれは！腕だけしか復活出来なかったのか！？ふざけやがって！」

暗い倉庫の中、怒りが混じった声が響いていた。しかし、その声の先に人の姿がなかった。その場所には何故か腕だけが浮かんでいたのだ。

「ちい…まあいい…何個か他の奴のコアメダルが手に入っただけでもよしとしよう…それに早くしないと奴らも目を覚ます…」

ガタツ

「！！…誰か来た…早くずらかるか…」

腕は音に反応して、そのまま姿を消した。

音のした方からはライトの灯りが見える。どうやら警備員のようだ。

「なんだ？…今…声が聞こえたような…」

警備員はゆつくりと奥に進んでいく。あたりにはいろんな大道具や小道具が置かれていた。そして、警備員が一番奥にまで行くと、そこにはその場所には不釣り合いな石箱があった。

「あれ？…こんな物あったけ？」

警備員は石箱を触れる。

その瞬間…

ガガガ！！

「うわ！箱が…動いた!？」

石箱は急に動き出して、蓋が開いたのだ。そして中から大量のメダルが宙に浮かんだのだ。

「うあああああ!!」

警備員は大声を上げて壁にへばりつく。目の前で不可解な事が起きて、警備員は完全に恐怖していたのだ。

そして宙に舞ったメダルは四つに別れて、人の形のように集まった。しかし、メダルが集まってできたのは四体の怪物だった。

「あ……ああ……」

警備員は言葉を失った。今の状況を頭では全く理解できなかった。そして一体の怪物は警備員に近づいたのである。

「お前の欲望…解放しろ…」

「よし！あのお店に、けっしていい！」

場所は変わって、今度は賑やかな会場。今、この場所は最近に出来た大きなショッピングモールである。その場所で元気な女の子の声が響いた。

「ちよつとのぞみ！一人で行かないの！」

その後ろから、もう一人の女の子が少し困ったように叫んで、のぞみと言う女の子を呼ぶ。

「だって〜美味しそうなクレープがあるんだもん！咲ちゃん！うら

ら！速く行こう！」

のぞみは後ろに居た女の子二人を呼びつける。

「待つてよ！私もクレープ食べたい！」

「のぞみさ〜ん、待つて下さい！」

二人の女の子、咲と呼ばれた女の子とつららと呼ばれた女の子が大きな声を出して、のぞみについていく。

「ちょっと！咲と、つららまで！…全くもう…かれんさんや舞も止めて下さいよ…」

怒つてた女の子は後ろにいた女の子達に呼びかける。

「あはは…りんさんごめんなさい…咲はあんなつたら止まらないから…」

舞と呼ばれた女の子は困った顔をしながら、怒っていた女の子のりに答えた。

「まあ仕方ないわよりん…のぞみ達すごい楽しみにしてたし…」

かれんと呼ばれた女の子はりんの肩を叩きながら、答えた。

りんはため息をついてがっくりと肩を落とした。
そんなりんの後ろに紫色の髪と緑色の髪をした女の子二人がりんに
寄る。

「りん、そんなに気を落としても仕方ないでしょう？のぞみの事な
んだから…」

紫色の髪の女の子は頬を膨らませながら、そう答え緑色の髪の女の
子もりんに笑顔で励ましていた。

「くるみ、こまちさん…ありがとう…」

りんは二人にお礼を言う。ちなみに紫色の髪の子がくるみで緑色の
髪の子がこまちと言う名前である。

「ほら～みんな速く速く！クレープ無くなっちゃうよ～」

のぞみはびよんぴよん跳ねながら、りん達を呼んでいる。

「のぞみ！そんな事してたら危ないよ～！」

りんが呼びかけたが、のぞみは聞こえずにびよんぴよんと跳ねてい
た。

ドーン…

その瞬間のぞみは歩いていった男の人とぶつかってしまふ。

「あいた！」

「おっと…」

のぞみはぶつかった拍子に転んでしまふ。男の方は何かを落とすしてしまう。

チャリーンと甲高い音が響く。

「あいたたた…あ…すいません…何か落としましたよ？」

のぞみは男の人から落ちた物を拾う。落ちた物は赤色をしたメダルであつた。

「ん？…赤い…鳥の絵がある…メダル？」

のぞみは今までに見たことないメダルを珍しそうに覗いた。確かにのぞみの言う通り、メダルには鳥の絵のような物が刻まれていた。

「あ…大丈夫ですよ…それは俺のメダルです…」

男の人はお辞儀をして、のぞみの持っていたメダルを受け取る。

「では…すいませんでした…」

男の人はメダルを受け取ると、そそくさと行ってしまふ。

「のぞみ〜！大丈夫！？」

心配でのぞみの所にりん達が集まった。

「あはは…りんちゃん、みんなごめんなさい…」

のぞみは申し訳無さそうにみんなに謝った。だが、みんなはのぞみが平気そうだったので、ホッと息をついた。

「キヤー！…！」

「ワァー！…！」

「いやあああ…！」

その瞬間、ショッピングモールの広場の方から叫び声が広がる。

「何!？」

咲が叫ぶ。のぞみ達は声のした方を向くと、広場の方向から沢山の人が逃げてきたのだ。

「何があったのかしら!？」

こまちは逃げてきた人達を見ながら、答えた。のぞみはこの状況を見て、険しい顔を見せた。

「みんな、行こう!何かあったら私達が何とかしなきゃ!」

その言葉に残りのみんなが頷いて、一気に広場に向かって走り出したのだ。

この日をもって、新たな戦いが新たな歴史が築かれようとしている。

メダル1（後書き）

さあ、次は多分バトルです！

皆さんこれからも見て下さいね！！

メダル2 (前書き)

はい!!!第2話です!

メダルやプリキュア達のメンバー達がどうなっていくか楽しみにして下さいね ()

メダル2

「なんだなんだ？あっちの方が随分騒がしいな…」

少年、松原まつはら 司紅しこうはショッピングモールの休憩所で、一人サイダを飲んでいた。

なにやら騒がしくなったのを感じたのか、下の方を覗く。

「きゃあああ！」

「うあああああ！！！」

「た、助けてくれ！！怪物が出た！！！」

下のモールの方を覗くと、そこには逃げ惑う大勢の人達がいた。

司紅は休憩所から動いて、出口に続く方向に逃げ惑う人達を見ていた。

「おいおい…何かあったんだよ…あんなに逃げて…怪物って…何かあったのかな…」

司紅はとりあえず、サイダを一気に飲み干してから走り出した。

「確かめて見るか…逃げるのは逆に危なそうだな…」

そう言って司紅は道を曲がるようにするが…

ドガッ！

「うあー！」

司紅は何かとぶつかってしまい、転んでしまう。

「いてて…何かとぶつかって…え？」

司紅は目を空けた瞬間、人生で一番驚いた。

自分の目の前には、腕だけが浮かんでいたのだから。

「あ…う、腕が…腕が浮かんで……」

「くそ！人間か！いきなりぶつかりやがって！！」

腕は驚愕する司紅を無視して、喋る。腕が喋るとは思えないが、明らかに声が腕から聞こえていた。

「全く…俺の邪魔を……ん？…貴様！？」

すると、腕はいきなり司紅を掴んで、壁に叩きつけた。

「ぐあー！」

司紅はわけもわからないまま、壁に叩きつけられる。

「お前…俺のコアメダルを持ってるな？」

「こ…コアメダル？」

「くそ！…ふざけやがって…いや…まてよ？」

腕は司紅を掴んだまま、動きが止まる。
何かを考えてるように。

「ふん…いい事を思いついた…人間！俺についてこい！！」

「な…うわあ！」

司紅はそのまま腕に引っ張られ、先に引き続けられて行ってしまった。

「…八百年か…長かったな…」

シヨッピングモールの中央、そこにはの怪物や怪人とも言える風貌を持ったのが五体居た。

今喋ったのは、身体が緑色の虫のような姿がうかがえる怪人である。

「そうだね…人間の方も八百年でかなり変わったみたいだよ？」

更にその後ろに、黄色く猛獣のような姿の怪人。

「だけど…欲望も大きく変わったようね」

その横には、青い色の魚のような姿の怪人。

「ううう腹減った」

その後ろには更に、白いような色で巨獣のような姿をしている怪人が居た。

「ふん…まあ最初は俺のヤミ を使って、メダル稼ぎだ…それがい

いだろ…」

そう言つて、緑色の怪人は最後の五体目の怪人による。

五体目の怪人も同じ緑色だが、姿が虫のカマキリのような風貌であつた。

「いいな…手っ取り早く…欲望を集める…」

緑色の怪人はカマキリの怪人に語りかける。その瞬間、カマキリの怪人は雄叫びを上げて、前に歩き出した。

しかし、その五体の怪物の前に人間の女の子達が前に現れた。

「あなた達！何をしてるの！」

その声は先ほど、ショッピングモールで買い物をしていた、のぞみ達であつた。

「何だ…貴様等は…」

「僕達にビビらないなんて、すごいね〜」

緑色の怪人はのぞみ達を睨みつけて、黄色い怪人は、自分達の前に現れたのぞみ達に興味を持ったように喋る。

「なんなのあいつら……フラッピ！あいつらまた闇の何とか!？」

咲は自分の腰についてるポーチに喋りかける。

すると、ポーチはポンと音と煙を出して、なんだかぬいぐるみのようなのになった。

「違うラピく、なんだかよく分からないけど、ヤバい感じはするラピく」

すると、ぬいぐるみ、フラッピと呼ばれたのは咲にそう告げた。

「あなた達は何者!?!…一体何が目的よ!?!」

くるみは怪人達に叫んだ。全く持って怯まないようすは怪人達をも驚かせた。

「ふん！…人間の癖に威勢がいいな…俺達は…欲望の怪人…グリードだ！！」

緑色の怪人はのぞみ達にそう言い放った。のぞみ達は、怪人の言った言葉を聞いて驚く。

「欲望の…怪人？」

「…グリード？」

こまちとかれんは怪人達の言った言葉を繰り返した。

「あらあら…なかなか面白いお嬢さん方ね…でも邪魔はされたくないわね…」

青い色の怪人は緑色の怪人にアイコンタクトを送る。

緑色の怪人はせれを見て、顔を再びのぞみ達に向ける。

「ふん！…行けヤミ！！奴らを潰せ！」

ヤミ と呼ばれるカマキリの怪人は緑色の怪人の指示を聞き、のぞみ達に迫ろうとする。

「……みんな行くよ！」

のぞみはそれを見て、みんなに呼びかけて、懐から携帯のような物を出した。

それに続いて、りん、うらら、こまち、かれんものぞみと同じ携帯を出した。

「舞！私達もいくよ！」

咲は舞に呼びかけて、舞が頷く。

それを見て、くるみも懐から大きな楽器のような物を出した。

「ふん…そんな物で、一体何ができる！ヤミ！行け！」

緑色の怪人はヤミをのぞみ達に放つ。

だが、のぞみ達は怯む事なく、懐から出した物をかざした。

「……プリキュア・メタモルフォーゼ……！」

「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

「スカイローズ・トランスレイト！」

のぞみ達が叫んだ瞬間、彼女達は大きな光に包まれる。
その光に、ヤミ と後ろの怪人達も少し怯んだ。

「うわゝ眩しいゝ」

白い色の怪人は目を押さえて、まぶしそうにする。

「おっと…何なんだろうね…」

黄色い怪人は回避に成功しつつ、のぞみ達の出した光に疑問を抱いていた。

そして、光が晴れた時、のぞみ達は姿が変わって、怪人達の前に立ちふさがった。

「大いなる、希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「はじけるレモンの香り！キュアレモネ ド！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

「知性の青き泉！キュアアクア！」

「輝く金の花！キュアブルーム！」

「きらめく銀の翼！キュアイ グレット！」

「青い薔薇は秘密のしるし！ミルキイローズ！」

彼女達は服装が変わり、今はプリキュアとして、怪人達の前に姿を現す。

プリキュアは、別世界の戦士。世界を守り、世界に希望を振りまく存在。

のぞみ達は伝説の戦士、プリキュアなのである。

「く…何なんだ…貴様等は！」

緑色の怪人はプリキュアに変身したのぞみ達を見渡した。

「へえ…八百年たった人間はすごいんだね…オズみたいなのがあるんだ…」黄色の怪人はプリキュア達を見て、更に不思議そうにみんなを見る。

「く…!…ヤミ 行くぞ! 奴らを倒す!」

緑色の怪人とヤミ はのぞみ達、変身したドリーム達に駆け出した。

「みんないくよ!」

のぞみ、いやドリームの掛け声と共に残りのプリキュア達が怪人に突っ込む。

今、欲望の怪人グリードと呼ばれる者達と、世界の希望を守りし、伝説の戦士プリキュア達がぶつかる。

メダル2 (後書き)

さあ！！バトル開始！どうなっていくのか！

またみてプリキュア (^O^)

メダル3 (前書き)

早くも戦いの展開！

皆さんよろしくお願ひします) (

メダル3

「はあああああー!!」

のぞみこと、キュアドリームはカマキリの姿の怪人に突っ込む。

それに続いて、ルージユ、レモネド、ミントが続いて、カマキリの怪人に突っ込んでいく。

ドガ！バキイ！ガア！ガア！ガア！

そのまま、ヤミとドリーム達が一身攻防の戦いに入る。ドリーム達の攻撃をヤミはさばく。

反対側ではかれんこと、キュアアクアとミルクィローズ、ブルームイグレットが緑色の怪人と対決していた。

「くたばれ！人間！」

「そうはいかないわ！」

ガア！ガア！ガア！ドギャ！バキィ！ドゴ！

アクアとそれに続いた三人も、緑色の怪人に猛攻撃を仕掛ける。

「へえ…強いんだね…最近の人間って…」

黄色の怪人はその戦いを見て、プリキュア達の強さに驚いていた。

「八百年の間が変わったって事ね…」

青色の怪人も驚いたように、自分達の仲間とプリキュア達の戦いを見ていた。

「加勢は別にしなくていいよね？」

「まあ…大丈夫でしょう…」

青色の怪人と黄色の怪人はとりあえず腰をかけて、観戦状態に入っていた。

仲間の怪人を信用しているのであろう。

「いくわよ！プリキュア・ファイヤーストライク！」

りん、ことキュアルージュは足の前に炎の玉を出して、ヤミ に向かって蹴り飛ばした。

「ギユアアア！」

ヤミ は炎の玉を食らい、後ろに吹き飛んだ。

緑色の怪人はそれを見て、アクア達から離れて、ヤミ の前に立つ。

「俺のヤミ はやらせんぞー！」

それを見た、うらら…ではなくキュアレモネ ドが飛び上がって、緑色の怪人に手を向けた。

「プリキュア・プリズムチェーン！」

レモネ ドは手から、黄色の鎖のようなを出して、緑色の怪人の身体に巻きつける。

「ぐ…身体が…」

「さあ今です！皆さん！」

レモネ ドの掛け声と共に、「こまち…」ことキュアミントとキュアア
クアが前に出る。

「プリキュア・エメラルドソ サ！」

「プリキュア・サファイアアロー！」

ミントからは緑色の円盤の形をしたものを、緑色の怪人に投げつけ、
アクアからは青色の弓矢が放たれた。

ドゴオオオオン！！

緑色の怪人の居た場所はミントとアクアの攻撃で煙が舞った。

「やった！」

ドリームはそれを見て、万歳をした。

「甘いぞ…貴様等…」

だが、緑色の怪人はまだ無事であった。ドリーム達は驚きながらも、再び攻撃体制に入ろうとする。

「ふん！させるか！」

緑色の怪人はドリーム達の動きをよんだ。そして、緑色の怪人の角のような物から、電撃がドリーム達に向けて発射されたのである。

「きゃああああああ！！」

プリキュア達はみんな、電撃をまともに食らい吹き飛ばされた。

「ね…加勢しなくて大丈夫だった…」

黄色の怪人は、笑いながらそう言った。

「ほな…二人共、場所は確認大丈夫やな？」

場所は変わり、プリキュア達が戦っているショッピングモールの外。そこで、通信機ごしのような音で声が響いていた。

「うん…大丈夫だよ…場所は間違ってる。中では戦闘が繰り広げられてるよ…」

その声に答えたのは、一人の女性だ。白い服に身に纏った、神秘的な格好だった。

その後ろにはもう一人、綺麗な金髪に黒い服を来た女性もいた。

「じゃあ…なのは…行くう。」

金髪の女性は白い服の女性…なのはに呼びかける。

「うん…そうだね…フェイトちゃん…」

なのはは、金髪の女性、フェイトの言葉に頷く。

「スターズ部隊隊長！高町 なのは！」

「ライティング部隊隊長！フェイト・Tハラオウン！」

「行きます！！」

そして、二人の女性は、そこから飛び立ったのだ。

「ぐ」

ドリームは、電撃を食らい、吹き飛ばされた。残りのプリキュア達も、同じようになっていた。

「手こずらせて貰ったな…人間共！」

緑色の怪人は、ヤミ と共に、電撃を食らったプリキュア達に留めをさそうと近づく。

(く…まずいわ…このままじゃ…)

くるみこと、ミルキイローズは痺れた身体を何とか動かしながら、ヤミ と緑色の怪人を睨みつける。
しかし、身体は殆ど言う事を聞かない。

「終わりだ！」

緑色の怪人が手を振りかぶろうとした瞬間だった。

怪人の前に、桜色の球体が横切つて、地面をえぐった。

「な！？だれだ！」

いきなりの攻撃に、緑色の怪人とヤミ だけじゃなく、観戦していた残りの怪人達も、攻撃が飛んできたほうに顔を向けた。

「管理局機動六課の高町 なのはです！双方、武力を控えてくださいー！」

その攻撃の来た先には、白い格好の女性、高町　なのはがいたのだ。
その後ろには、黒い服の女性、フェイトもいた。

（あ、あの人達…何者！？同じプリキュアなの！？）

キュアイ　グレットこと、舞はいきなり現れた、二人の女性に同じ
プリキュアではないのかと思った。
横にいた、キュアブルームこと、咲もイ　グレット同じ考えで、ド
リーム達も同じであった。

（あの子達は…誰？…私達と同じ魔道師？…ではないわよね…全く
魔力を感じない…）

しかしなのは達も、ドリーム達の姿を見て、驚いている。グリード
達の姿も驚いた様子だったので、ここに居る者達とは、接点がない
ようだ。

「何だかまた違う人間が出てきたみたい…八百年たった人間って本
当にすごいみたいだね」

黄色の怪人は新たに現れた、なのは達に更に興味深そうに眺める。

それと対照的に緑色の怪人はまた邪魔者かと言いたげに、手を震わす。

「くそ！またメダル集めの邪魔をする奴らか！ふざけた人間共だ！」

緑色の怪人はなのは達が来て、更に苛立ちを出している。

「もういい！全員吹き飛ばしてやる！！」

緑色の怪人は角に電撃を溜めていく。

もし放たれたら、先ほどの威力の比ではない電撃が放たれるだろう。

「くらええええええ！！」

ドガアアアアア！！！！

そして放たれた電撃はなのは達とプリキュア達が居た場所を吹き飛ばした。

「ふん……」

緑色の怪人は鼻で笑って、勝利を確信したようにした。

だが、煙が晴れた先にはプリキュア達をシルドで守っていたなのは達の姿があった。

「大丈夫ですか？」

フェイトは倒れているプリキュア達に優しく呼びかける。

「あ…はい…ありがとうございます…」

ドリームは助けてくれた、フェイトとなのはにお礼をした。

「…な、なん…だと…」

緑色の怪人は倒せたと思った者達が生きていて、身体を震わして悔しそうにする。

「あなた達は…一体…」

アクアはなのは達の事について聞こうとした瞬間、水の波動が飛んできて、なのは達の近くの地面を削った。

「く!…話はあとのようですね…私の事も、あなた達の事もあとで話しましょう!」

なのははそう言って攻撃が飛んできた方向を見る。

そこには、全ての怪人達がなのは達に向かって歩いてきた。

「うふふ…今のは警告よ…あなた達は私が倒すわ…」

青色の怪人がそう言って、緑色の怪人、青色の怪人、白い怪人、カマキリのヤミ がそれに続く。

「あいつらは俺だけで充分だ!」

「まあまあ…そんな事いわない…」

「う 人間倒す〜ヤミ の邪魔はさせない〜」

「…人間…倒す…欲望の邪魔させない…」

五体の怪人が全員に迫る。プリキュア達となのはとフェイトはそれ

を見て、戦闘体制をとる。

「なんだか…わからないけど…ここは協力するって事で…」

ドリームはなのはに言うとなのはは、微笑んだ。

「いくぞー!!」

その時、緑色の怪人とヤミ は他の怪人達よりも早く、駆け出そうとした。

ドリーム達もそれを見て、駆け出そうとした瞬間だった。

その時…

「まで！俺達も混ぜてもらおうか！」

全員が戦っている広場の上から、声が聞こえた。

そこには、一本の腕と、クタクタになっていた、松原 司紅がいたのであった。

メダル3 (後書き)

やっと主人公きたよ…さあ次回はどうか…

カウント・ザ・メダル!

タカメダル×1

メダル4（前書き）

第4話！さあ主人公の活躍はあるのか！期待して見て下さいね！！

メダル4

「な…何なんだ…この状況…」

松原 司紅はとても驚いていた。

腕にぶつかつたり、その腕にいきなり引つ張られて、広場の二階に連れて行かれたと思いきや、そこでは、派手な格好の女の子達と明らか、人とは言えない怪人達が何だか戦っていたのだから…

「え！？なにあれ！？腕が浮かんでる？！」

ルージユは司紅の横で浮かんでる腕に明らかに驚いていた。
まあ、驚かないほうが凄いとさえよう。

「ねえ…イグレット…腕って浮かぶのかな？」

「うかばないんじゃない？普通は…」

ブルームとイグレットと逆に冷静になつてる感じになつていた。
ドリーム達やなのは達ですら、あんぐりとしていた。

「は！何だか、おかしい状況だな！お前ら！」

腕は、怪人達の方を指さしていた。緑色の怪人はその腕を睨みつけるようにした。

「黙れ！腕だけしか復活出来なかった貴様に言われたくはないぞ！
アंक！」

緑色の怪人は最後に腕の名前らしき物を叫んだ。

「貴様みたいな虫頭に言われたくないぜ！ウバア！」

アंकは仕返しとばかりに、緑色の怪人の名前を叫ぶ。
ウバはアंकの言葉にギリギリと拳を握り締める。

「落ち着きなよウバ…アंकの何時も悪口だよ…」

「そつよ…気にしっちゃ駄目よ…」

黄色の怪人と青色の怪人は、そう答える。白い怪人は全く気にせずボケーツとしている。

「は……えらそうに相変わらずの奴らだな！カザリ！メズル！そ

してガメル！」

アंकは順番に、怪人達の名前を言う。

とりあえず、そんな状態にプリキュア達となのは達は、痺れをきらしたように言う。

「あ、あなた達は何者ですか！？あの怪人達と知り合いなんですか
！？」

「凄いです！腕が浮いてます！」

「ありえない！腕が浮かぶなんて！まさかお化け！？」

「あの人が操っているんじゃないかしら？」

「でも、糸であんなふうに浮かぶなんてありえないわ！」

「まさか！手の精霊なのかな！？」

「あるのかな…そんな精霊…」

「と、とりあえず、あなた達もそこを動かさないで下さい！」
「私達は管理局機動六課です！」

みんなはとりあえず、思った事を言うが、全員が全員言う為に、かなりごちゃごちゃしていた。

「うるせー！！他の人間共は黙ってる！！」

アंकは騒ぐプリキユア達となのは達を黙らせると、司紅を無理やり立ち上がらせる。

「おい！人間！」

「な、何だよ！てかこの状況説明してくれよ！腕！」

「腕って言うな！いいか？お前はさっき俺がしゃべっていた奴らと戦え！なんだかよくわからん人間共は無視しろ！！」

「いやいや！状況が分からなすぎだ！意味分かんない！」

司紅はもうすでにパニック状態なので、腕と普通にしゃべっているが、なのは達やプリキユア達から見たら、ものすごくシュールな光

景である。

「おい！ーアंकク！ーごちゃごちゃ言ってないで、何をするか言ってみろ！ー！」

ウバはアंकクに挑発するように、答える

しかしアंकクは、きにしないように司紅に、何かをつけた。

それはベルトのようなものに見える。

「！？…まさかアंकク…アナタはその人間をオズにする気！？」

メズルは司紅につけられたベルトを見て、声を荒げた。

「お…オズ？」

ドリームは聞き慣れない言葉のオズを繰り返す。外の者達もそんな感じであった。等のベルトをつけたれた司紅は、全くそんな事が頭に入らずに焦っている。

「わけわかんないよ！オズってなに！？ー一体俺どうなるの！？」

「人間！俺の言うことを聞け！お前が持つてる赤いタカメダルとこの二枚のメダルをそのベルトに入れる！」

そうやってアंकは、司紅に黄色と緑色のメダルを渡した。

「メダル…俺が前に拾ったやつか！？」

司紅はポケットから赤いメダルを取り出す。

「そうだ！そして、このメダル達を入れる！」

「いや…でもなんで俺が…」

司紅が言おうとした時、先ほどの水の波動が司紅とアंकめがけてとんできたのだ。

「ぬあ…！」

「ちい！メズルの奴、こいつを变身させないでか…！」

アंकは司紅を引っ張りながら叫ぶ。メズルは水の攻撃を緩めな

い。

「悪いけど、オズには退場願いたいわ…ウバもお願い…」

メズルは攻撃したまま、ウバに指示を出す。

「ふん！…ヤミ！アंकと隣の人間を倒せ！」

「は…」

ヤミは更にウバの指示を聞き、上に居る司紅達の方に向かう。

「！させない！」

それを見たなのはがヤミ目掛けて、桜色の魔力弾をうった。

しかし、その攻撃はウバに弾かれてしまう。

「貴様らの相手は俺だ！」

なのは達はウバと他の怪人、カザリとガメルに囲まれていた。

「僕達もいるよ、ウバ〜」

「う〜人間倒す〜」

三体の怪人に囲まれながらもプリキュア達もなのは達も、強気に構えていた。

その頃、司紅は水の攻撃を避けながら、アंकと逃げていた。

「うわ〜！死ぬ〜！」

「馬鹿！お前が変身しないと、本当に死ぬぞ！」

アंकは脅しとばかりに司紅の胸ぐらを掴む。

そんな事をしているうちにカマキリのヤミも司紅に迫っていた。

「ああ！もう！わかったよ！なにすればいい！」

「とりあえずメダルを入れる！早く！」

アंकの指示に、司紅はいそいそとメダルをベルトにあるメダルを

三つ入れるためにある場所に入れていく。

「入れたぞ！次は！」

「次はそのベルトを傾けて、右にあるやつでメダルを読み取れ！」

「これで…ってわあ！！！」

しよつとした時、ヤミの鎌が司紅を切り裂こうとしたのだ。

司紅はギリギリで交わして、下に降りる。

「うわ！いてて…ん？しまった！」

しかし、司紅が降りた場所は、プリキュア達とグリード達が戦っている近くだった。

「あわわ…あの人危ないよ！」

ドリームは、焦りながら司紅を助けようとするが、それより早く、ヤミが司紅に迫る。

「変身しろ！！人間！」

アंकはそれを見て、司紅に叫ぶ。

司紅は慌てながら、ベルトの右側についている物を手に取った。

「くそ！やけくそだ！」

キュイン！キュイン！キュイン！

取った物からは音が出て、司紅はそれをメダルを入れた所にスライドさせた。

ティン！ティン！ティン！

「変身！！」

《タカ！・トラ！・バッタ！タトバ！タトバ！タトバ！》

歌のような物が流れた瞬間、司紅のからだを鎧とは違うような何か
が纏ったのだ。その姿は、タカの頭、トラの腕、バッタの足で出来
ているようだった。

そんな姿に、プリキュア達やなのは達、司紅自体もかなり驚いていた。

「凄い！変身したよー！！」

ドリームは目の前で変身した司紅に驚いていた。

「私達も変身だろー！！」

そこから、ルージュの容赦ないツッコミが決まった。

仕方ないが…

「あれは…なんなの？…フェイトちゃん！？」

「わからない…何だろう…あの姿…あの怪人達と関係あるのかな…」

なのはとフェイトも変わった司紅の姿を見て、かなり驚いていた。

「おお…凄い…なんだこれは…」

司紅は自分の姿を触って、とても驚いていた。

「あ！あぶない！」

そんな事をしていたら、後ろからレモネ ドの音が響く。

司紅はその声に反応して、上を向くと、そこには、カマキリのヤミ
が司紅目掛けて飛んできていたのだ。

「うわあ！あぶない！」

司紅は足に力を入れて、よけようとした途端、緑色の足の鎧が光り
出したのだ。そして司紅を高らかにジャンプを繰り返した。
まるで、バッタのジャンプ力のようなだった。

「うわあああ！！」

だが、いきなりのジャンプ力に司紅自身がついていけずに地面に落
ちる形になってしまった。

しかも、その下にはミルキイローズとルージュがいたのだ。

「え！？」

「ちょっと！なんで落ちてくるのよ！」

ドゴォー！！

「あいたた…あれ？…何だか柔らかい感触が…」

司紅が下に目にやると、まるで押し倒した形で、ミルキイローズとルージユの胸に手が掴んでいたのだ。

ミルキイローズもルージユもそれに気づいて、一気に顔を赤らめた。

「…えっと…ありが…いやいや…ごめんなさい。」

「「ふざけんなー！！」「」

二人の鉄拳が炸裂。オズ、司紅は思いきり吹っ飛んだ。

こんな形で、今この場所にメダルの戦士、オズが誕生したのである。

(…アイツにやらせたの…間違いだっただか…)

そんな時、アंकはそう思った。

メダル4 (後書き)

さあとうとう仮面ライダー登場！次回をお楽しみに。 。 。 ;)

カウント・ザ・メダル

タカメダル×1

トラメダル×1

バッタメダル×1

メダル5 (前書き)

すいません！お待たせしました！

長い間待ってくれた方ありがとうございます！

新たに更新完了です！

また頑張っていきます！

メダル5

「く…オズに変身させてしまったか…ふざけやがって…」

司紅が、オズに変身したことにウヴァはワナワナと拳を握りしめた。

「落ち着きなさい…ウヴァ…まだなりたての子供よ…どうにかなるわ…」

メズルはウヴァの肩を叩いて、宥める。

舌打ちをしながらやも、ウヴァはメズルに言われる通りに落ち着く。

「これが…オズ？…なんだか…すごい力を感じる…」

司紅は自分の姿を触れながら、驚きを露わにしている。

後ろには胸を触られた事により、オズとなっている司紅を睨みつけていた。

「えっと…とりあえず…どうすりゃいいんだ？」

司紅はあたふたと構えながら、グリード達を見渡す。

「えつと…オズさん？」

「ん？君は…」

そんな司紅の前にドリームが現れて、にっこりと微笑みかける。

「私はキュアドリームです…正直あなたの事はわかりませんが…一緒に戦ってくれますか？」

ドリームは真っ直ぐな目でオズを見つめる。司紅はそんな目に慌てながらも、コクコクと頭を下げた。

「よし！みんな大丈夫！この人は味方だよ。多分！」

「多分かい！」

ドリームの言葉に突っ込みを入れるルージユ。

他のプリキュアのみんなは、お笑い芸人ばりにこけていた。

「…とりあえず…彼の事は後回しかな？フェイトちゃん…」

「うん…敵か…味方かはわからないけど…悪い人じゃなさそうだしね…」

そう言って、なのはとフェイトもグリード達に対して、デバイスを構える。

(ふん…いいぞ…あそこにいる連中はよく解らんが、カザリ達と対立しているようだから…ちょうどいい…これなら…コアメダルを奪えるかも知れないしな…)

アंकは腕をふよふよと浮かせながら、壁の後ろで思考を働かせていた。

「ふん…グリードに勝負を挑むなど…行け！ヤミ！」

「は！オズは、私が叩き潰します！」

カマキリのヤミは司紅に向かって突っ込んできた。

「ぬああ！きた！？」

司紅は思わず反対側に向かって走り出してしまった。
ヤミ はそれを追いかける。

「あ！なのは、彼を助けないと……」

フェイトやプリキュア達は司紅を助けようと向かうとするが、ゲリード達に道を塞がれてしまう。

「悪いけど……ここは通さないよ……」

「アナタ達はここで終わりよ……」

「終わりだ〜」

「うわあああ！」

「どうした！オズ！避けていては、私には勝てんぞ！そんななら、

変身しなければ良かったものを！」

カマキリヤミ は、二本の鎌を司紅に向かって連続で切りかかる。

「く、うわ！ど、どうしょー！」

司紅は、鎌を避けながらあわてている。

アंकはそんな司紅を見ながらイライラしていた。

「ばか！人間！腕についでるクローを使え！」

「え！？腕…これが！」

司紅は腕に力を入れると、真ん中のトラの紋章が光り、腕についでいたクローが展開された。

「うお！これが！」

「ちい！させるか！」

カマキリヤミ は鎌で再び切りかかる。

キーン！ガキーン！ガア！キーン！キーン！

司紅はクローを前に出して、鎌を防ぐ。

「よし！わかんないけど、いける！おりゃ！」

バキィーン！

「ぐあああ！！！」

チャリン！チャリン！

懐に飛び込んだ司紅はクローをカマキリヤミに叩きつける。
カマキリヤミはそのまま吹っ飛び、傷口からメダルを撒き散らした。

「すごい！これが…オズの力…」

（ふん…あの人間…なかなかやるな…）

アंकは思わず、力を使いこなしている司紅に少し関心を持つ。

しかし、その瞬間にオズに向かって、電撃が放たれる。

「うあー!？」

「ちい!今の電撃、ウヴァか!」

アंकの見ている先には、ウヴァがカマキリヤミの前にたっていた。

「やるな…人間!だが、このままにはさせんぞ!」

ウヴァはカマキリヤミと一緒にオズの前に立つ。

「ちくしょ…二対一は卑怯だろうが…」

司紅は何とか立ち上がって、ウヴァとカマキリヤミを睨みつける。

「おい!人間!このメダルを使え!」

すると、アंकは司紅に向かって一つのメダルを投げつける。

「うお！これは…黄緑色のメダル？」

司紅はアंकから受け取ったメダルを見る。そこには、カマキリの紋章が入ってた。

「入れ替える！人間！」

「あ…なるほど…」

司紅は真ん中のトラメダルをとり、カマキリメダルを入れて、再びベルトを傾けてスキヤナーで読み取る。

ティン！ティン！ティン！

【タカ！カマキリ！バッタ！】

音声と共に、真ん中の紋章がトラからカマキリに変わっていた。

「くー！くぞー！ヤミ」

「はいー！」

カマキリヤミ とウヴァは同時に司紅に突っ込む。

「よし…いける…はあああ…!!」

司紅は足に力を入れると、バツタの力をつかってジャンプを繰り返してそのまま腕についてるカマキリソドでヤミに切りかかる。

「なに!?!」

バキイイン!カガガ!!

カマキリソドで切った瞬間、足で連続で蹴りながら、バク宙を繰り返す司紅。連続攻撃にヤミは更にメダルをチャリンと鳴らして落としていく。

「貴様!」

ウヴァはその後ろから拳を繰り返すが、司紅は再び、バツタの力で宙を舞い、ウヴァの後ろに回る。

「なんだと!?!」

「セイヤ…!!」

掛け声と共に、カマキリソドをウヴァに斬りつける。

ガキイイイ！！

「うおおああ！！！！」

チャリン！チャリン！チャリン！

ウヴァは吹き飛び、メダルを撒き散らした。

その中には、緑色のクワガタの紋章が入ったメダルが混じっていた。

「はあ…はあ…はあ…」

司紅はフラフラになりながらも、そのメダルを広い、仮面の中で不適に笑った。

（あの人間…強い…完全に使いこなしていやがる…だが…あぶないな…）

アंकはそう思いつつ、司紅の強さにニヤリと不適に笑ったように腕を動かした。

司紅の実力は明らかに、グリードすらも驚かすものであった。戦いはまだ、始まったばかりだ。

そして、新たなメダル、クワガタメダルをゲット。

メダル5 (後書き)

司紅は最初の方から、かなりの力を発揮！

これからの戦いは更に過熱に…

カウント・ザ・メダル

タカメダル×1

トラメダル×1

バッタメダル×1

カマキリメダル×1

クワガタメダル×1

メダル6 (前書き)

お待たせしてすみません！テスト勉強大変でした（　　）

と言っわけで復活！

至らないところがあつたらバンバン言ってください〇（^ - ^）〇

メダル6

わからなかった…何だか身体が勝ってに動いていた…思考よりも身体が先に反応した感じだった。

不思議な力に纏われた俺は、迫ってきた敵の攻撃を全く恐れなかった。

むしろ、自分の攻撃が簡単に当たる感じがした…

そんな奇妙な感覚に捕らわれながらも、俺はウヴァと呼ばれた怪人から落ちたカマキリのメダルを無意識に拾っていた。

「はあ…はあ…これはクワガタのメダル？」

司紅は息を切らしながら、ウヴァから落ちたクワガタメダルを拾った。

「よくやった人間！そのメダル、俺が使えと言うまで使っなよ！」

アंकは司紅にそう答え、司紅はベルトの左側についているメダル入れに、ウヴァから取ったクワガタメダルを入れた。

「おのれ、オズ！俺のメダルを返せ！！」

ウヴァはカマキリヤミと共に立ち上がり、怒りをぶつける勢いで、司紅に向かって突撃してきた。

「おい！人間、くるぞ！さっさと行け！」

「だあああ！解ってるわ！腕お化け！！」

司紅は言われるがままにウヴァ達に突っ込む。

「つりゃあああー！！」

その反対側では、残りの三体の怪人達、カザリ達とプリキュア、なのは達がバトルを繰り広げていた。

「それにしても、あのオズって言うあの鎧みたいなの、すごい力ね…」

水の弓矢を放ちながら、キュアアクアがオズの戦い方を見て驚いている。

他のプリキュアやなのは達もオズのかなりの力に驚いている。

それは怪人側、カザリ達も驚いていた。

「ふう…全く、ウヴァがあんな簡単にメダルを奪ってしまうなんてね…」

「あの…オズになった坊や…侮ってたわね…」

「ううオズめ…」

三体の怪人はプリキュア達の攻撃を避けながら、オズを観察していた。

「く！あの怪人達、やっぱり強いわね！！」

余裕を見せながら戦うカザリ達にキュアルージュは眉を寄せる。

「大丈夫だよ！あの、オズって人もなのはさんって人達も頑張ってる！だから、諦めちゃ駄目だよ！」

そんなキュアルージュにキュアドリームは笑顔で肩を叩いて、カザリ達に突っ込む。

「まったく…ドリームらしいわね！」

それに続いて、キュアルージュ達も突っ込む。互いに格闘技で乱戦にもつれる。

「うわ〜！！！」

そんな乱戦の中、向こう側から、司紅がプリキュア達の方に吹っ飛ばされてきた。

「あ！大丈夫ですか！？」

それを心配してか、なのはとレモネド、イグレットが駆け寄る。

「あいたた…大丈夫だよ…ありがとうございます…」

イグレットの伸ばした手をつかみ、司紅は立ち上がる。

司紅が吹き飛ばされた方向からは、ウヴァとカマキリヤミが近づいて来た。

「オズ！さつさと俺のコアメダルを渡せ！！」

ウヴァはギリギリと拳を握りしめ、怒りを現わにする。

司紅はプリキュア達やなのは達の盾になるように立ち、ウヴァとヤミを睨みつける。

しかし、反対側からも、カザリ、ガメル、メズルが迫っていた。

「えっと…オズ…さん？大丈夫ですか？」

キュアブルームは敵を睨みつけながらも、オズに話し掛ける。

「あ、うん…何とか…」

司紅はウヴァから目を離さないようにしながら、心配してくれるプリキュアに話す。

互いに心配しながら、ジリジリと怪人達に詰め寄られる。
かなりの威圧感がプリキュア達、なのはとフェイト、司紅に迫る。

(く…やばい…どっすりゃ…)

司紅は後ろに後退しつつ、焦りを感じる。プリキュア達もなのは達もそうだった。

その瞬間だった。隠れてたアंकが動いた。

「人間！さっきのクワガタメダルを使え！！」

アंकの言葉に司紅は、ハツとしながら、さっきしまったクワガタメダルを取り出す。

(よし…あの人間になら、コンボも行けるかも知れない！)

アंकなそう思いながら、司紅を見る。

司紅は怪人達を見つめながら、タカメダルを取り出して、先ほどのクワガタメダルを入れた。

怪人達はそれを見て、驚き一瞬たじろぐ。

「あ、あの坊や！まさかコンボを！？」

メズルはらしからぬ動揺を見せる。

カザリとガメルも後ろに後退をしていた。

「く！まさか、俺のメダルで！」

ウヴァはわなわなと震え出す。

「よせ！人間！それはいけない！」

カマキリヤミもかなり焦ったようにとめようとする。

「な、なんか…あの怪人達が動揺してる…？」

プリキュア達もなのは達も怪人達の動揺に驚いた。それと同時にオズのコンボってやつはそんなにやばいのかと思った。

司紅は気にしていなかった。ただ、感じるままにメダルを入れ替えて、そのままかたむかせ、一気にスキヤナーでメダルを読み取った。

ティーン！ティーン！ティーン！

「おらららららー!」

分身したオズ、司紅はそのまま怪人達に突っ込む。
ウヴァ達は焦りながらも戦うが、やはり数の差で圧される。

「なのは!今なら!」

「うん!いける……ディバイン!」

なのははそれを見て、杖にエネルギーを溜める。

「ドリーム!今よ!」

ミルキイローズもそれを見て、ドリームに言う。ドリームはうんと頷いた。

更にブルームとイグレットも手をつなぎ、何かをしようとしていた。

「いけ!人間!もう一回、メダルをスキャンしろ!」

アंकは叫ぶ。司紅は言われるがままに、再びメダルをスキャンする。

【スキヤニングチャージ!!】

音と共に分身したオズ達は一斉に飛び上がり、怪人達目掛けてキックを放つ。

「せいや!!」

ドゴオオン!!!

巨大な音と共に辺りにキックが炸裂する。ウヴァ達はギリギリに回避が成功するが、カマキリヤミは避けきれず直撃する。

「ぬああああ!だから、よせと言ったのにイイイイ!!」

カマキリヤミはたちまち、爆炎と共に爆発した。辺りには沢山のメダルが飛び散る。

「はあ…はあ…やった…」

司紅はそのまま、膝をつく。分身は消えた。

ウヴァ達はそれを見て、司紅に攻撃をしかけようとする。

「よくも!俺のヤミを!!」

ウヴァに続いて、回避に成功していたカザリ達も突っ込む。
司紅はやばいと思いつながら、何とか立ち上がるうとするが、立ち上がれない。

(く…やばい…)

司紅はそのまま目を閉じた。

「させないよー!!」

しかし、そこにプリキュア達となのはが立ちふさがった。

「プリキュア・ツインストリームスプラッシュー!!」

ブルームとイグレットは両手から重なったようなエネルギー波を放った。ガメルはそれを食らい、宙にまった。

「ミルキイローズ・メタルブリザードー!!」

ミルキイローズも続けて、メズルに技を放ち、吹き飛ばした。

「…バスター!!」

なのはは溜めていたエネルギーを一気に放つ。カウンター気味に食らったカザリは簡単に吹き飛ばされる。

「プリキュア・シユ ティングスター!!」

ドリームはなのはの攻撃の爆炎の中、煙幕を吹き飛ばしながら、ウヴァに突撃。ウヴァは直撃を食らい吹き飛んでしまった。

怪人達はメダルを撒き散らしながら、地面を転がる。

アंकはそれを見て、素早く色のついたメダルだけを取った。

「はは！これはかなり儲けたな！」

白や黄色、青のメダルを掲げた。

「く…己…アंक…オズに人間共…」

ウヴァは怒りを露わに立ち上がる。他のグリード達も立ち上がり、カザリが前に出た。

「駄目だよウヴァ…ここは一旦退かなきゃ…」

カザリとメズルはアイコンタクトをすると、目の前に水と竜巻を起こした。

「うあ!?!」

「く！」

プリキュア達は目を覆い、グリード達を追おうとしたのは達も吹き飛ばされた。

そしてそれがなくなった時、すでにグリード達は居なくなっていたのであった。

メダル6 (後書き)

と、今わけて次から話が動いていく感じにしたいです (^-^-) v

これからもよろしくお願いします！

カウント・ザ・メダル

タカメダル x 1

トラメダル x 1

バッタメダル x 1

カマキリメダル x 1

クワガタメダル x 1

チータ メダル x 1

ゴリラメダル x 1

ウナギメダル x 2

メダル7 (前書き)

お待たせしました！

伝説とメダルと魔法を更新しました！

これから新展開なので、よろしくお願いします！

メダル7

「じゃあ…あなたたち皆さんに聞きたいことがあるので、ついてきてもらってもよろしいですか？」

戦いが終わりあたりが落ち着いた時、フェイトがプリキュアのメンバーと司紅、アंकに話しかけた。
ちなみに司紅とプリキュアのみんなは変身を解いていた。

「はい！私たちは全然いいですよ！ね、みんな？」

のぞみがみんなに向かって言うと、残りのみんなも納得したようにうなずいた。そんな中、アंकは司紅をひっぱりながら出口に向かっていった。

「ちょ！？行かないで下さいよ！！！」

なのはがそれに気づいて、司紅達を止めようとする。アंकは舌打ちしながら、なのはに詰め寄る。

「悪いが俺達はお前らについていく気はない。かってに行かせてもらおう。」

「それは困ります。あなたやには聞きたいことがたくさんあるんですよ。」

「知ったことか。おい、人間行くぞ！」

「え…ちょ、俺の意見は無視かよ！」

アंकは司紅の胸元を引つ張っていく。そんな中、フェイトが二人の前に立つ。

「お願いです。私たちについてきてください。」

「ふん！しつこいぞ！行かないと言ってるだろ！」

「…そうですか。なら…」

フェイトは剣を構えて、アंकに向けた。

「力づくで来てもらいます。」

「ちい…わかったよ…」

アंकは司紅の首元を離れた。フェイトもそれを見て、安心したのか剣を引いた。だが、アंकは司紅の耳元にゆっくりと近づいた。そのまま小声で話しかける。

「おい、人間。俺の言うことを聞け。メダルで変身してここから逃げろ。」

「お前…まだそんなこと言ってるのか？ついてけばいいだろ？」

「いいのか？そんなこと言って…オーズに変身したやつはな、死ぬんだぞ？」

「え？…」

「でも、俺の言うことを聞けば、死なないで済む。まあお前が逃げようとしないうら教えないかどな。」

アंकの言葉に、司紅は顔を真っ青にして汗をだらだらと流した。アंकはそのまま司紅にメダルを渡して、ベルトを渡した。

「ほら、速くしろ！」

「はい!!！」

司紅はメダルを素早くセットし、一気にスキャンした。

ティーン！ティーン！ティーン！

「へ、変身!!！」

変身を叫んだ司紅。のぞみ達やなのは達は驚いて司紅のほうに向いた。

「タカ！・トラ！・チータ！」

しかし、音声とともに変身は完了していて、タカ、トラ、チータの紋章が入ったオーズに変身していた。

「な！なんで変身してるのよ!!！」

りんがあわてて叫ぶ中、フェイトとなのはは急いで司紅のほうに走った。

「ほら！走れ!!！」

アंकは司紅に指示を出しながら、すでに通気口のところから逃げた。

「うわあああ！待ってくれよ！！」

司紅は急いで出口に向かう。しかしそのスピードはものすごく、瞬でフェイトとなのはから逃げだした。

「な！？」

「うそ！？一瞬であんなスピード！？」

「ま、まるで…チーターみたい…」

「み、見えませんでした…」

みんなが啞然とする中、オーズとなった司紅はもうすでにシヨピングモールからいなくなったのであった。

「はあ…はあ…」ここまで来れば…」

とりあえず変身した司紅は、人影がない場所まで移動していた。

「よし…良く逃げる事が出来たな…」

「あ！腕野郎！！」

すると、上からフワフワとアंकがきた。

司紅はつかみかかりながらアंकに詰め寄る。

「お前！俺が死ぬってなんだよ！？まさかオズにはなんか呪いでもあるのかよ！！」

「ああ…さっきのか…嘘だ。」

司紅はピタッと動きを止めて、目をパチクリさせた。

「嘘…？え？…まじかよ！騙しやがったな！！」

「は！簡単に騙されるお前が悪い！」

司紅はアंकにつかみかかるが、ヒラヒラと避けられてしまう。

「く…くそ…腕野郎…とりあえず、これからどつするんだよ…」

「どつするって…それは…」

アंकが言いかけると、後ろから人影が現れた。
人影は女性で、大きなモニターを掲げていた。

「おい…何者だ…貴様…」

「あ…えっと、こちらのモニターをご覧ください…」

女性はさっぱりとした口調のまま、モニターを突き出した。
モニターは急に付いて、そこには男が映っていた。

「はじめまして!!グリードのアंक君!それにオズとなった司
紅君!」

「あ、あの…あなたは?」

「なぜ、俺のことを知っている…」

「ははは！！教えてあげよう！！私は鴻上！今日は君たちを祝いにきたのだ！ハッピーバスター！！！」

そして、アंकと司紅がそんな状態になっている中、ショッピングモールではなのはが誰かと通信を取っていた。

「じゃあ…はやてちゃんいいかな？」

「うん、ええよ。じゃあ他のみんなも連れて、待ってるから…その女の子達連れて来てな。」

モニター越しに、はやてと呼ばれる女性がニッコリとしてなのはに手を降った。

なのはも手を返して、そのままモニターを切った。

「じゃあ…えつとのぞみちゃん。」

「はい！何でしょう！-」

のぞみは元気よく、なのはに近づく。

「準備が出来たら、行きたいんだけどみんな大丈夫かな？」

「全然大丈夫です！みんな行く気満々ですから」

「そっか…じゃあ、よろしくね…」

「はい！……あ、そうだなのはさん！私達はこれからどこに行くんですか？」

のぞみは首を傾げて、行く場所を訪ねる。

なのは顎に指を当てて、ちょっと考える仕草をしてのぞみは答えた。

「えっと…うーん…ミットチルダって言う魔法が繁栄してる所かな。」

「うわーすごい！魔法があるなんて！楽しみだねみんな！」

「はいはい…あなたの気持ちもわかるけど、落ち着きなさい…」

のぞみのテンションにりんは呆れながらも何とか受け流していた。

それとは裏腹に、咲やうららもテンションが上がって目がキラキラしていた。

「じゃあ…みんな、ミットチルダに行くのけっぺい！」

メダル7（後書き）

さあ動き出してきました！
これからもよろしくお願いします！

メダル8 (前書き)

未永くお待たせしてすいません！

やっと伝説とメダルと魔法を更新出来ました！

待っていた人は本当にごめんなさい (<|>)

クリスマスも終わり、年が明けそうですが、これからよろしくお願
いします！

また、早めに更新したいと思っておりますので (^o^)/

メダル 8

「さあ、こちらです。入って下さい。」

司紅とアंकは女性に言われるまま、あるビルの最上階まで案内された。

司紅は少し抵抗しながらも、扉を開けた。

「やあ！！ようこそ！！選ばれた戦士、司紅くん！グリードのアंकくん！」

入った瞬間、やけにテンションの高いおじさんがいた。あの女性が持っていたモニターに映っていた人だった。

「えっと…アナタが鴻上さんですか？」

「…ふん…たかが人間が、俺たちに何のようだ？」

アंकが高圧的な態度をとるが、鴻上は笑顔のまま、ある箱を取り

出して、ニツコリと笑った。

「さあ、今日は祝いだ！二人共、ハッピーバースデー！！」

叫んだ鴻上は、その箱を勢いよく開けた。

その箱の中には、特大のケーキがあった。

二人は更に解せない顔をして、鴻上を見る。

だが、彼はニコニコと笑いながら司紅達に近づいた。

「さあ！つもる話もあるだろうが、私はまず君達に頼みたい事があるのだよ！」

鴻上は司紅の肩を掴む。司紅はビクツとなりながらも、鴻上の迫力に押される。

「あ…あの…協力って…？」

「うむ！それはだね…」

鴻上が何かを言おうとするが、それは間に入ってきたアंकに阻まれる。

「さてよ・・・その前にお前がなぜ、俺やオーズについて知ってるのか、教えてもらおうか！」

アングの言った事は確かに、疑問に思っていた事だ。

鴻上はそれを聞いて、うなづきながら辺りを歩き出した。

「そうだね・・・確かにそれは言えている・・・だが！司紅君！」

「は、はい!？」

「君はまだ、知らない事が多いのではないか？いきなり怪物騒動に巻き込まれ、腕にメダルを渡されて、オーズと言う存在になってしまった・・・知らない事が沢山あるはずだ！」

「あ・・・はい・・・確かに・・・」

司紅は小さく頷く。司紅は確かに、此処に至るまでの経路はほとんどが、腕だけのアングに巻き込まれた形でここに要るのだ。

「だから、まずは彼に色々教えたいのだが、構わないかい？アング君。」

「…ちい…いいだろう。」

アंकは渋々、後ろに下がって机に体を置いた。体と言っても腕だけであるが。

「で…鴻上さん…あの怪人達や、オーズって一体何なんですか？」

「ふむ…話は八百年前にさかのぼる…その時代のある王様は、ある物を作り出した…」

「ある物…ですか？」

「そう！それが、いま司紅君が持っているメダル！オーズに変身する事が出来るアイテム！コアメダルだ！！」

鴻上は司紅の方に指を指した。

司紅はビクツとなりながらも、自分のポケットに入っているメダルを取り出した。

「…これが、ある王によって作られた…コアメダル…」

「そう！その王は、神になろうとしたのだ！その欲望が、メダルとして生まれた！彼はコアメダルを錬金術師達に作らせたのだよ！」

「…そんな事が…じゃあ、あの怪人達は？アイツらは人間じゃなかったし…身体から、このコアメダルが出てきましたよ？」

「うん！問題はそこだ！王はコアメダルを作る事に成功した！…だが、それらのコアメダルは意識を持ち、グリードと呼ばれる物として生まれたのだよ！！」

鴻上はバツと手を広げて、グリードという言葉を強調した。いちいち、リアクションがデカい人である。

「グリード…それが、あの怪人達なのか…なんで、生まれたのですか？」

「彼らはね、身体がメダルで出来ているのだ。一体に最大9枚のコアメダルがある。だが、コアメダルは最大10枚あったのだよ。」

鴻上はスクリーンを出して、メダルの種類を見せた。赤いメダルと青いメダルと白いメダルと黄色のメダルと緑色のメダルが映っている。

「しかし、メダルを一枚だけ外した時、まるで、残りの一枚を求めように、9枚のメダルは意識を持ち、五体の怪人として生まれたのだよ！」

「……なる程…この腕だけの怪人…アंकもその時生まれたってわけだ…」

司紅はチラッとアंकを見ると、アंकは気づいたのか、舌打ちをしてそっぽを向いた。
腕だけだどね。

「そして、彼らのエネルギーはコアメダルと沢山のセルメダルと言うメダルで出来ている…グリードはセルメダルを集める為に、人間の欲望を利用するのだ！」

「欲望を…利用する？」

「そうだよ！グリードはセルメダルを人間の身体に入れて、ヤミーと言う怪人を作る事が出来るのだ！」

「ヤミー？」

司紅が怪訝が顔をしていると、アंकが目の前に来て、銀色のメダルを差し出してきた。

「これがセルメダルだ…今の俺には出来ないが、これを人間の身体に入れ、その人間の持っている欲望を、ヤミーと言う怪物として具現化させるんだ。」

「…それで、その欲望通りに怪物…ヤミーが色々と行動を起こす…すると、このセルメダルって言うのが集まるのか？」

「ほう！司紅君はかなり鋭いようだね…素晴らしい！！」

「何となくですよ……とりあえず、だいたい分かりました…それで、鴻上さんは一体何がしたいんですか？」

司紅が言うと、鴻上はニツコリと笑って、司紅の手を掴んだ。

「私はね！君達に頼みたいのだよ！コアメダルを集める事を！！」

「ええ！？もしかして…グリード達から、コアメダルを奪えと？」

「その通りだよ！！君とそこにいるアंक君にも協力してもらいたい！！！」

アंकはまた舌打ちをした。

どんだけ舌打ち好きなんだよと思う。

司紅はとりあえず、今までの事を頭の中で整理整頓しながら考えていた。

（えっと…なんでこんな事なっちゃったんだろ…ただの学生でこんな事になるなんて思わなかったし…かと言って、ここで断るのも怖いし…でも、またアイツらと戦わなきゃいけないのかな…ううん…こうなったら…）

司紅はふうと息を整えて、鴻上に向き直る。

「えっと…わかりました。協力します！面白そうですし…」

「面白そう…？…ふふ…はははははは！！そんな理由で手伝ってくれるなんて、君は面白い！！素晴らしいよ！！！」

鴻上は更にテンションを上げて、司紅の腕をブンブン振り回す。

司紅は困りながら苦笑いしていた。

こんな形で、殆ど巻き込まれた形になって、面白そうと言つ理由で、司紅は戦つ事になったのであつた。

その後ろでは、アंकはまた舌打ちをしていたのであつた。

メダル8 (後書き)

今回は説明回です。

バトルがいきなりだったので、こんな感じでした (< | >)
次回もお待ちくださいね！

メダル9 (前書き)

明けましておめでとございます!!

初っぱなから投稿させてもらいます!

今回はなのはとプリキュアメンバーの方面です!

もし、ワールドを読んでる方ならある意味わかる事がありますw

とりあえず、これからよろしく願います!

メダル9

「うわー！ここがミッドチルダか！スッゴイー！」

夢原のぞみはミッドチルダの光景を見ながら、そうつぶやいた。

なのは組は、あのグリード達の戦いの後、プリキュア組を連れて、ミッドチルダに帰還していた。

今は、全員ヘリコプターで移動しており、上からのぞみ達はミッドチルダを眺めていた。

「魔法の国って言うわりには、ビルが多かったってりねー！りっちゃん！」

はしゃぐのぞみを横に、りつもビルなどを眺めていた。

「まあ確かに、イメージでは妖精が沢山いたり、魔法の樹やなにやらあって、ほつきや絨毯で飛んだりしているイメージはあるわよね

…」

りんやのぞみがそう言っていると、なのはは困ったような顔をする

「にははは…確かにそうだね…ミッドチルダは魔法と言っても、科学も進歩した世界だから…」

なのはが言うと、かれんとこまちも興味を持ったように頷く。

「なる程…魔法だけが発展した世界ではなく、魔法と科学が両方共に発展した世界ってわけね…」

「小説のネタになりそうね〜両方が発展してる考え方はなかなか面白そうです!」

こまちはたびたびメモを書いていた。彼女自身、小説を書くのが好きだようだ。

「フェイトさん!フェイトさん!ここら辺にはおいしい店屋さんとかは無いナリか?」

すると、さきがフェイトに詰め寄って、目をキラキラさせていた。その言葉を聞いたうららとのぞみも同じように、目をキラキラさせていた。

ここに来てまで、食い意地をみせるのが、彼女達のクオリティであるだろう。

「あゝ…えつと、そう言う事に関しては詳しくはないんだ…でも、良かったら店屋さんのパンフレットならみせてあげるよ?」

「「「わー!やったー!」」」

その瞬間三人共万歳をした。のぞみは手をぶつけて痛そうにうずくまった。

くるみはため息をはきながら、のぞみの腕を撫でている。

その横では、りんと舞が困ったように顔を見合わせていた。

「さて、みんな着いたよ!あれが、私とフェイトちゃんが働いている機動六課だよ。」

なのはが指差すと、ヘリコプターがある場所に着くように下降していた。

その下には、大きな施設がある。これが機動六課なのだろう。

「うわー!すごいです!新しいって感じですね!」

「じゃはは。まだできたばかりだからね。ほら、つらちゃんも降りる準備お願いね？」

そう言うと、ヘリコプターはヘリポートに降りた。

「ほらほら！嬢ちゃん達、ゆっくりと降りねーと危ないぜ！」

そして、ヘリから降りる際には、ヴァイスと言う操縦士がのぞみ達を誘導して上げていた。

「ありがとうございますー！」

礼を言うのぞみ達、なのは達もプリキュアメンバーのあとに降りてくる。

チャリン。

その時、なのはから、何かペンダントが落ちた。

こまちはそれを拾うと、思わず中身を見てしまう。

「えっと…Tukasa・ragoon?」

ペンダントの中には、男性の写真とこまちが読んだ文字が刻まれていた。

「あ！その、ペンダント。」

なのはあたふたと困りながら、こまちに近づく。

「あ、すみません…見るつもりではなかったんですが…」

こまちはなのはにそのままペンダントを返す。

「いいよいよ。ありがとうね、こまちちゃん。」

「じゃあ、みんな部隊長に合わせたいから、ついてきてね。」

「「「はい！！」」

いい返事をしながら、フェイトとなのはのあとに、プリキュアメンバーはついていった。

「ほな、よくきたな。えっと…プリキュアの皆さん。」

「えっと…アナタが部隊長の八神 はやてさん？」

ある部屋に、のぞみ達が入るとそこにはデスクに座っている、一人の女性がいた。彼女は八神 はやて。なのはやフェイトの上司で、立場的に機動六課で一番えらい人である。

「そや、今回は色々あながとね。私からもお礼を言わせてもらっね。」

「いえいえ、そんな事はないですよー？」

のぞみ達は照れたように、頭をかく。そんなみんなに笑顔でほほ笑むはやて。そのはやての後ろからは、謎の飛行物体が出てきた。

「はい！私からもお礼を言わせてくださいですー！」

その飛行物体は、人間と姿をしていたが、あきらかに人間の手のひらサイズしかなく、思わずプリキュアメンバーは硬直する。

「あれ？皆さん、どうしたんですかー？」

「……………かわういいいいいいい！！！！！！」

のぞみとつららと咲はドーンと飛行物体の女の子に近寄った。あまりの迫力に、飛行物体の少女はビクとこわばってしまふ。

「うわー！ちっちゃい！かわいい！！あなた何者！？妖精さん！？」

「あわわ！お名前はなんて言っんですか！？私はつららって言いますー！！」

「食べ物はどうやって食べてるの！？ぱんぱかぱんのパン食べる！？」

三人は興奮しているのか、動転しているのかわからないが飛行物体の少女に詰め寄る。少女は困ったようにあわあわとしている。

それを見て、くるみとりんと舞が三人を引っ張ってとめる。

「えっと…なのはさん…あれってその……………人間なんでしょうか？」

かれんは驚いたように、なのはに質問する。冷静組のかれん達も、驚きは隠せないようである。

「えっと…まあ、みんなにわかりやすく言っと精霊だね。ラインと言って、はやて部隊長につかえてる精霊かな？」

「はい！私は精霊のラインフォース！ラインと呼ばれてるので、よろしく願いますー！」

リインはえっへんと胸をはる。のぞみ達も楽しそうに自己紹介をする。

「まあ、自己紹介はまたあとでちゃんとやろうな。機動六課にも、君たちぐらいの子おるし。」

「本当ですか！？楽しみだね！！」

のぞみはうれしそうに、くるくる回る。

「ほな…これから、あの未確認生命体に対して、どう対処していくか考えたい。なのは隊長達もプリキュアのみんなもええか？」

「うん！私たちも大丈夫です！みんな、いくよー！」

「……………おおー！！」「……………」

いきおいまかせで叫ぶプリキュアメンバー。こっちでも、新たな動きがあることだろう…

メダル9（後書き）

今回はミッドチルダに来た話ですね！
次回あたりから動き出す場合があるのでよろしくお願いします！

メダル10（前書き）

10投稿しました！

今回から、新たな展開きたー＼（＾〇＾）ノですよ！

楽しみにしていた人達お待たせしました！

メダル10

「おのれ！あんな人間達なんぞにメダルを奪われるとは！」

ガチャンとガラスのビンを割るようにウヴァが腕を振るつ。

その後ろには、カザリとメズール、ガメルがいた。

グリード達は今、ある廃墟のビルに身を潜めていた。

怪物の姿でウロウロしていると、人間達に対して目立ってしまうとわかった為に、グリード達は今ここに姿を隠していた。

「まあとりあえずは、これからどうするかを考えないとね……」

カザリは顎に手を当てて、考えている。何か作戦をねろうとしているようだ。

「まずは、あのオーズの坊やから、メダルを奪い返した方がいいんじゃないかしら？」

「お腹すいた〜」

メズールはガメルの頭を撫でながら、提案をする。

ガメルはシヨボシヨボと頭を下げながら、石つぶてを投げている。

「うん…確かにメズールの言う通りかも知れない。」

カザリは座っている所から降りて、メズールの場所に近づく。

「でも、今八百たったこの世界じゃ…僕達にも分からない事が多すぎる…あの、女の人間達だよ…」

「そつだ！あの人間共…俺達の邪魔をしゃがって…一体何だったんだ！？」

カザリの言葉を聞いて、更に怒りをあらわにするウヴァ。

カザリはやれやれと言ったように手を開いていた。

「あれはプリキュアと言う奴らだ…途中乱入してきた2人はわからないがな…」

暗闇の中、4人とは違う声が聞こえた。

グリード達はガタツと動いて、戦闘体制を取る。声の主に対して警戒をしてくるようだ。

「待て…グリード達よ…私は戦いをしに来たわけではない。お前達と協力しに来た…。」

暗闇から見えた影はマントに身を包んでいて、顔は見えなかったが、不思議な力を纏ったような奴だった。

「君は何者だい？僕達とあの人間達を知ってるようだけど…」

「我が名はダーク・デメス…光の力を憎み、世界を闇に包む存在だ…。」

「おい…司紅。このアイスってのはうまいな…もっと無いのか？」

その後、アंकと司紅は鴻上会長と色々話したあと、司紅が一人暮らしをしているアパートにいる。

アंकは、腕だけだと不便と言う事があったけど、なぜか今は人間の姿をしていて普通に怪人には見えなかった。

「…なあアंक…お前、その体どうしたんだよ…」

「ああ…病院って所で大怪我で運び込まれた人間の体を、コッソリ借りてきた…」

「な…お前…」

泥棒っていいかけて、司紅は新聞を見る。

新聞の記事には「病院で重傷の患者が、謎の行方不明？」と書かれた記事を見つける。

ドツと体から色々な液が出てくるようだった。

「そんな事よりも、アイスはないのか？もつと食わせる！」

「ああー！！わかったから黙れ！買って来るから動くなよ！？絶対ここにいろよな！」

司紅は立ち上がって、財布をポケットに入れてからそのまま外に飛び出した。

「はぁ…全く…あいつのせいで胃がもたれそうだわ…」

トボトボと元気なく歩き始め、司紅はそのままコンビニのある所まで歩く。

その道には多くの店が並んでいて、華やかな色合いになっていた。

「さて…アイス買うついでに、色々と買い物しておくか…」

司紅はそのまま、商店街に入っていく。
後ろに黒い何かが動いていた事に気づかずに…

「さて…何を買うか…」

キヨロキヨロと辺りを見渡して、買う物を決める。
アイスは適当で構わないが、一人暮らしの学生に取っては肉や野菜
などは欠かせない。

「よし…じゃあ、これと…これと…うーん…これもほしいかな…」

ドガッアアアン！！

大きな音がした。いきなり店内に響いた音に全ての人が驚いた。
司紅も例外ではない。

「な、なんだ…今の音…あっちの方からか？」

司紅は慌てて、コンビニを出た。

たくさん野次馬が見ている方向には、大きな煙がたっていた。

（ここからじゃ分からないが…何か起きたんだな！…とりあえず、行ってみるか…）」

司紅は反対側から回って走り出した。

「ガアアアアア！！」

ある場所では、民家に被害を出して、暴れる謎の存在がいた。

全身は黒く、目は赤く光り、大きなキバをしたオオカミのような人

が辺りを破壊していた。

中には血だらけで倒れる人間もいて、大混乱だった。

そんな時、そのオオカミ怪人に向かって、八人の人影と、謎の飛行物体が迫っていた。

「「「「チェインジ・プリキュア・ビートアップ!」」」」

「「「心のタネ!いくです〜!!」」」

「「「「プリキュア・オープンマイハート!!」」」」

八人の人影は光りに包まれた。

この八人は、声にした通り、まぎれもない…

プリキュアなのだ。

「もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!」

「摘みたてフレッシュ、キュアベリー！」

「とれたてフレッシュ、キュアパイン！」

「うれたてフレッシュ、キュアパッション！」

「フレッシュ、プリキュア！！！！」

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の光、キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の光、キュアムーンライト！」

「ハートキャッチ、プリキュア！！！！」

八人の少女、それは…前のシヨピングモールでグリードと戦ったプリキュアであった。
だが、前のプリキュアとは少し違うようだった。

「え？…あの子達って…」

駆けつけた司紅は、その姿を見て驚いていた。

「まさか…鴻上会長が話していたプリキュアか？…でも、前にあったとは違う格好だぞ？」

司紅は疑問に思いながらも、壁の後ろに隠れながら、プリキュア達を見ている。

プリキュアの方は見るからに凶悪そうな怪人に恐れずに立ちはだかっている。

「な、なんだか…怖い感じがしますね。」

でも、ピンク色のプリキュア、キュアブロッサムと名乗っていた子は少しビクツとしていた。

「何言ってるのブロッサム！私達がいれば怖いもんなんでない！」

その横で、仁王立ちしている水色のプリキュア、キュアマリンはブロッサムと違い堂々としていた。

「そっだよ、ブロッサム！私達は悪には屈しない！」

「ええ…プリキュアとして、人々を守るのよ。」

黄色のプリキュア、キュアサンシャインと紫色のキュアムーンライトはブロッサムにそう言った。

「うん！幸せを奪う奴は許さないんだからね！」

「ええ！完璧な私達のチームワークを見せてやりましょう！」

「そっだね！絶対大丈夫って私信じてる！」

「私も精一杯頑張るわ。」

順番で、キュアピーチ、キュアベリー、キュアパイン、キュアパッションがブロッサム達の横に並ぶ。

その姿は女の子でありながら、戦う戦士の風格だった。

オオカミ怪人はそんなブロッサム達に一步步近づいている。
今でも戦いは始まりそうだった。

(戦う気らしいな……プリキュアの女の子達……俺は……どうする?)

司紅は懐から、オーズドライバーを取り出した。
それを眺めて、眉を潜める。

「俺は……」

司紅が悩む中、プリキュア達と謎の怪人の戦いは始まった。

メダル10（後書き）

さあ次回！プリキュア達と謎の怪人の対決です！

ちなみにオオカミ怪人はオリジナルですよ！

メダル11（前書き）

再びメダル11を投稿しました！

執筆が続くって気持ちいいですねw
まあ出来るだけ遅れは取り戻してみます！

では、始めます！

メダル11

「それで、司紅くん！君はプリキュアの事は知っているかい！？」

鴻上とは話の中、司紅はプリキュアと言う単語を聞いていた。

「プリキュアって…確か、ニュースとかになってる謎の少女ですか？」

「その通り！そして、君が戦った場所にいた女の子達はそのプリキュアだよ！！」

鴻上はモニターを開いた。

そこに移っていたのは、ショッピングモールでグリードと戦っている、プリキュアの姿だった。

「こ、この子達が…プリキュアだったのか…」

「ああ！途中で参加してきた二人は分からないが…それ以外の女の子達は、プリキュア！謎の敵と戦う、キュートな戦士達さ！！」

鴻上はバツと手を掲げている。

司紅はそのテンションに圧倒されながらも、プリキュアが存在が気になった。

「鴻上さん…それで、プリキュアを俺に見せた理由は？」

「はは！彼女達の戦う理由は、至ってシンプル！正義さ！！今回もグリードに立ち向かう様はまさしく正義の味方だ！！」

バン！と強くモニターを叩きながら、プリキュアを解説する鴻上。
もしかしたら、プリキュアにもある種の興味があるのかも知れない。

「正義の味方が…かつこいいですね…」

「司紅くん！彼女達はきつと、君のメダル集めに、必ず関わってくるだろう！もしかしたら、一緒に戦うかもしれないし…敵として、戦うかも知れない…」

司紅は困ったように頭をかく。
その反応が見たかったのかと言わんばかりに鴻上は司紅の肩を掴む。

「そんな時、君は…どうする!？」

そして、今はプリキュアは司紅の目の前で、謎の敵と戦いを繰り広げていた。

「…メダル集めの時じゃなかったにしても、いきなり鴻上さんの言った通りになるなんて…」

司紅はオーズドライバーを握りしめて、戦いを見ていた。

オオカミのような怪人はプリキュア達と互角に戦っているが、プリキュア達のチームワークに少し押されていた。

「プリキュア！マリンインパクト！」

「プリキュア！サンシャインフラッシュ！」

ドカアアアア！！

「グガアアアア！！」

マリンとサンシャインの攻撃に怯む怪人。
すかさず、残りのプリキュアが打撃で圧倒していく。

「プリキュア！ダブルキック！！」

「プリキュア！ダブルパンチ！！」

ピーチとベリーのコンビネーションキックと、パインとパッションのダブルパンチが見事に怪人に決まる。

ドガアア!!

激しい音と共に一気に吹き飛ばされたプリキュア達。
司紅の目にも、何がおきたかわからなかった。

「プリキュアはん！大丈夫かいな！」

「ぷりぷ〜！」

「っっプリキュア〜!!」「っ」

反対側では、ちっこいぬいぐるみみたいなのが、ふよふよと飛んで、
プリキュア達に駆け寄っていた。

（ちょ！なんか喋ってる！何なんだ…てか、プリキュア達は大丈夫
か!?!）

司紅がみつめる先には、プリキュア達は瓦礫を退かしながら、立ち
上がっている姿があった。

「い、今のは一体何なの!?!」

ベリーが驚く中、プリキュア達の前には…

三体のオオカミ怪人が立っていた。

「ハハハ! ザンネンダッタナプリキュア! ワレワレハ、サントイデヒトツノカイジンダ!」

左側の怪人は目が青く光り、カタコトでしゃべりだした。

「私一人ではなかったんですよ…しかも、喋るとも思わなかったでしょう?」

真ん中の怪人は、目が赤い為、さっきまで一人で戦っていた奴だ。

「我々は光の殲滅者、突撃隊長のケロベロスだ。貴様等プリキュアはここで倒す。」

右側の怪人は、より鋭く黄色い目をした奴で、冷静な雰囲気をして

いた。

オオカミ怪人達が、まさか喋るとは思わなかったので、思わずプリキュア達は驚いた。

「あわわ！まさか喋る事が…」

「それより、光の殲滅者と言うのは何かしら？アナタ達の組織？」

驚くプロツサムを尻目に、ムーンライトがケロベロスに向かって話しかける。

「フフ！キサマラハココデシヌ！オシエルギリはナイ！！」

ケロベロス達は、そのまま一気に突っ込む。

プリキュア達も、反撃をするが、さっきまでとは違い明らかに強くなった敵に押されていた。

「く！強い！さっきまでは本気じゃなかったんだわ！」

パッションは格闘で応戦するも、先ほどの2体のケロベロスの攻撃で、ダメージを食らって動きが鈍っていた。

他のプリキュア達も同じで、ケロベロスのスピードとパワーに押されていた。

「私達の不意打ちとは言え、弱すぎですよ。」

「く、私達をなめないで！」

サンシャインは強い口調で言うが、ダメージは顔にも出ていた。

司紅は、さっきまで優先だったプリキュアがやれていて焦っていた。

「まじかよ…マズいぞ…このままじゃ…」

司紅は決心したように、オーブドライバーを装着した時だった。ガシツと腕を掴まれた。

見てみると、アंकが相変わらず不機嫌そうに、司紅の腕を掴んでいた。

「お前…アंक…」

「帰りが遅いから見て来たら…司紅…何をする気だ？」

「何って…プリキュア達を助けに…」

そう言うと、アंकは更に腕を強く握り、司紅のクビを掴んだ。

「プリキュアだったか？奴等には奴等の戦いがある…メダル集めに関係のない事に首を突っ込むな。」

「でも…あのままじゃ…」

「黙れ。あんな奴等ほっとけばいい…お前だって、損な戦いは避けたいだろ？」

アंकの言葉に眉を潜めるながらも、司紅はアंकを力の限り引き離した。

「悪いな…アंक。確かにメダル集めには関係はないかも知れない…けど…」

クルツと背を向け、司紅はプリキュア達の方に走り出した。

「おい！止まれ！司紅！」

アングの制止も聞かず、メダル入れから、コアメダルを取り出して、メダルをセツトする。

キュイン！キュイン！キュイン！

「力を手に入れた男ってのは…どうしてもカッコつけたいんだよ！」

ティン！ティン！ティン！

「変身！！！」

《タカ！・トラ！・バツタ！タトバ！タトバ！タトバ！》

司紅は変身して、そのまま、怪人達の前に立ちはだかった。プリキュアもケロベロスも、いきなりの乱入者に驚いた。

「ナ…ナニモノダ！キサマハ…」

「…俺は…オーズ…仮面ライダーオーズだ！！」

メダル11 (後書き)

さあ次回どうなるか！
楽しみにしてくださいね！＼(^ー^)/

カウント・ザ・メダル

タカメダル×1

トラメダル×1

チーターメダル×1

クワガタメダル×1

カマキリメダル×1

バッタメダル×1

ゴリラメダル×1

ウナギメダル×2

メダル12（前書き）

再び12を投稿w

何かテンション上がってます！手も進みます！きたこれ！

今回は視点がかわってます！

メダル12

まさか…あのオオカミのような怪人が、三体いたなんて思いませんでした。

私達はここまま負けてしまうのでしょうか。
そんな…弱気な事を考えてしまった時でした。

「ナ、ナニモノダ！キサマハ…」

「…俺は…オーズ…仮面ライダーオーズだ！」

仮面ライダーと名乗る上下が三色の謎の人物が私達、プリキュアの前に現れました。

「仮面ライダー…オーズ？」

いきなり現れた仮面ライダーと名乗る人？に私、ブロッサムだけではなく、他のみんなも驚いていました。

「カメンライダー？イキナリアラワレテ、ワケノワカラナイコトヲイウナー！」

一体のケロベロスの怪人が、さっきより怒っている。

まあいきなり在られた事に何か言いたい気持ちもわかりますが…
マリンやピーチ達も何か言いたそうですし…

それより、この人は味方何でしょうか？
ムーンライトもそう思っているのか、少しオーズって人を警戒しているようです。

「そんな事気にするな！俺はプリキュアを助けに来た、通りすがり

の仮面ライダーだ！」

仮面ライダーの人はビシッとポーズを決めて、私達の味方と言いました。

な、何かノリのいい人のようですが、そんな態度にマリンとベリーが思わずぶっこけてしまいました。

「ちょっと！あんた何者なのよ！仮面ライダーって何よ！！」

マリンがおもわずオーズさんに詰め寄ってます！

あわわ、大丈夫でしょうか？

「ふ…私達を無視してはいけませんよ！」

ってそんな事してるうちにマリンとオーズさんに敵が迫ってきてますよ！？

危ないですー！！

「君は下がってな！」

「ちょ！あんたって…うわ！」

ドガア！！

マリンを突き飛ばして、オーズさんは敵の攻撃を受け止めました。

びっくりしましたが、やっぱり悪い人ではないようです！

「ふふ…相手をすると云うのですね。でも、私達を甘く見ない事です！！」

「ぐ…悪いが、負けないぜ！」

ガアア！ドガ！バキイ！

オオカミ怪人に対して、激しい攻防戦です！
どうやらオーズさんもかなり強いようです！

「み、皆さん！私達も戦いましょう！オーズさんは悪い人じゃなさそうですし……」

私が言うと、みんな頷いてくれた。

マリンだけは少しムスツとしていましたが……

「ぐわ！く、本当に強い！」

オーズさんは強いとは言え、三体の敵に押されています。

「はぁ！……」

「とりゃ！」

ですが、パインとサンシャインがそれを助けてくれました。二人共さすが必要です！

「君達は……」

「私はキュアパインです！協力します！」

「キュアサンシャインです！一緒に戦いましょう！」

サンシャインとパインの言葉にオーズさんはグッと親指をたてました。

どうやら了承してくれたみたいです。

「私達も忘れないでね！」

ピーチ達もオーズさんの前に立ちます。

ちゃんと私もいます！

このままオーズさんに任せても悪いですしね。

「クク！イイダロウ！キサマモフクメテタタキノメシテヤル！」

来ました！三体共、すごいスピードです。

「おりゃああああー！」

ドガっ！ガア！バギイ！！

激しい戦闘の中、みんなも頑張ってます。
私も負けていません！

「プリキュア！ハピネスハリケーン！！」

「プリキュア！ブロッサムシャワー！！」

ドガアアン！ガアアン！！

「ふふ…そんな攻撃では甘いですよ。これぐらいしなればね！」

そう言うと、相手は大きな爪を出して、目の前から姿を消した。

「き、消えた！」

ズバアバババン!!!

「きゃあああ!」

一瞬でしたが、オオカミ怪人が見えました。

でもその瞬間、私は宙をまって地面にひれ伏していました。

「ブロッサム!」

「よそ見をしている暇はないぞ!」

ズバ!ズバア!ズバア!ズバア!ズバ!ズバアバババン!!

「ぐあああああ!」

「「「「きゃああああ!」」」」

再び敵のスピードにオーズさん、パイン、ベリー、サンシャイン、パッションが吹き飛ばされてしまいました。

「ふ…パワーもスピードも私達にはかないませんね…」

「く…あ、足が…」

ベリーがいたそうに足を押さえてる。

よく見ると、切り裂かれたみんなは、私も足が血だらけになってました。

これじゃ動けません！

「フッフ！マツタクソンナテイドデ、デンセツノセンシトハワラワセル！」

オオカミ怪人達はあざ笑うように、私達を見つめます。

立ち上がりたいけど、立ち上がれません…

「ま…まだた！なめるな！」

倒れる私達の前には、オーズさんが立ち上がってました。

同じように足にダメージがあるはずなのに…すごいです。

「動けるプリキュアの皆さんは動けないプリキュアさん達をお願い！」

それを聞いて、ピーチ達が私達を運んでくれました。
オーズさんは一人で大丈夫何でしょうか!？」

「オーズ…アナタも不思議な力を持っているようだが…その程度ではかないませんよ…」

「へ！要するに、パワーもスピードも追いつけばいいんだろ？」

そう言うと、オーズさんは白いメダルと黄色いメダルを取り出しました。

何なんでしょう？

そして、それを腰に着いてるベルトらしきところの黄色いメダルと緑色のメダルと入れ替えました。

キュイン！キュイン！キュイン！

ティン！ティン！ティン！

《タカ！・ゴリラ！・チーター！》

すると、さっきまで上下で赤、黄色、緑だったのに、赤、白、黄色に変わりました。

「姿が変わった…それに胸の紋章みたいなのも変わったわ！」

ムーンライトが言ったとおり、胸の紋章もさっきまでと変わってました。

「タカ…ゴリラ…チーター…？な、なんかよく解らない音が…」

マリンは怪訝な顔をしていました。

私にも詳しくはわかりませんが、動物の力を使っているようです！

「姿を変えたところで、俺達には勝てんぞ。」

「…いくぜ…オオカミ野郎！」

その瞬間、オオカミ怪人もオーズさんも凄まじいスピードで格闘を
始めました。

「ナニ！？オイツイテイルダト！？」

「おりゃー！ー！」

ドゴオー！！

「グアアアアー！！」

青い目のオオカミ怪人はそのまま、ゴリラの腕のような装甲に吹き
飛ばされました！
すごいパワーです。

「なかなかやりますね……」

「戦いは始まったばかりだ……まだまだいくぜ!」

オーズさんは……大きな声を上げました。

私はそんな彼を見て、思わず口を開いていました。

「あれが……仮面ライダー……」

メダル12（後書き）

さあ！次回どうなるかお楽しみに！

メダル13 (前書き)

連続投稿 W

さあ盛り上がってきました！

ちなみに成人式が今日です！

メダル13

「はああああー!!」

ガア！ドガア！バゴオ！

激しい打ち合いを俺とオオカミ怪人は続ける。

ゴリラとチーターのメダルを使っても、数の差は埋まらないので、このままじゃジリ貧だ。

ちよつとまらずいぜ…

「プリキュア！シルバーフェルテウエーブ!!」

ドゴオオオ!!

そんなピンチの時、紫色のプリキュアの攻撃が飛んできて、俺を助けてくれた。

見ると、水色のプリキュアと金髪のピンク色のプリキュアが駆けつ

けてくれた。

「プリキュア…ありがとう！」

「いえいえ！あ！私は、キュアピーチです！よろしくお願いします
！」

「私はキュアマリンよ。さっきはごめんね…」

「キュアムーンライトよ。今は一緒に戦いましょう。」

三人共、名前を覚えてくれた。
なんかそれが俺にはすごく嬉しい事に感じる。

「よしー！いこうー！」

一気に四人で突っ込んだ。

だが、三体の怪人達はニヤリと笑ったように見えた。

「クラエー！！」

ゴオオオ!!!

三体の怪人達達は口から大きな光線をはいてきた!

そんなのありかよと思いながら、俺はプリキュアの盾になるように三人の前に立つ。

ドガアアン!!!

「うあああああああ!!!」

背中が焼けるように熱かった。

まずい…このままじゃ意識がとぶ…

ドゴオオオオオオオオン!!!

意識が跳びかけのまま、俺は吹き飛ばされる感覚に落ちた。ただ、普通ならそのまま硬い地面に叩きつけられる感覚がするはずなのに、何故か柔らかい感触が全体を包んでいた。

目をあけると、プリキュア達が俺を受け止めてくれていた。しかも、足を怪我していたプリキュアのみんなもだった。嬉しいとか思っていたけど、よく状況を見ると、顔は何やらおっぱいらしき物に挟まれているし、両腕は女の子の身体にめっちゃめっちゃ触れてるし…てか、もう身体全体がプリキュア布団で包まれている…

柔らかい…

やべ、鼻血出た。

「ちょっと、流石にどかないと重いつて！」

青紫色のプリキュアが重そうにしていたのを見て、俺はやっと意識が覚醒した。

「あーご、ごめん！今どくから…」

平謝りしながら俺は身体を動かす。

その時、ズキイと痛みがきた。

やっぱり敵の攻撃は強力だったようだ。

受け止めてくれていたプリキュア達もダメージがあるようだった。

「みんな大丈夫か？」

「へ…プリキュアを甘くみないでよね！まだまだやれるしょ！」

キュアマリンは強気に言うが、足はフラフラだ…
他のプリキュア達もヤバそうな状態に見える。

かくゆう俺もかなりフラフラな状態だぜ…
ヤバす（<―>）

せめて、あの時グリード相手に使ったコンボってのが出来れば…

でも、クワガタのメダルはアंकの奴が持つてるし…

全く…コンボは危険だから俺の指示なしでは使わせないって言いやがるし…

さっきアंकに反抗しちゃったからな…
ピンチだ…

「ちい…あのバカ…だから戦うなって言ったんだ。」

その頃アंकは、木の枝に座りながら、司紅達の対決を見ていた。

「…このまま奴が負けてしまってもこまるな。だからと言って今の司紅の状態でコンボをやらせるのもな…」

今の状況をどう対処するか、アंकが考えている時だった。下の方で、バイクが止まって、ヘルメットをつけた謎の人物が降りてきた。

「あん？…何者だ？キサマ…」

アंकが話しかけると、ヘルメットをつけた人物はそのままメットを取る。

長髪の黒髪で、かなり美人傾向に入る人物だった。

「まあ今の状態はピンチね…でも、あんたがメダル渡さないなら、

私が司紅君に渡しちゃうわよ?。」

「なんだと?...お前...」

アंकが言いかけたと同時に、女性は懐からオレンジ色のメダルを取り出した。

「!?!?お前!そのメダル!」

女性はニヤリとアंकに笑いかけて、そのメダルを司紅に向かって投げつけた。

「さあ...これでプリキュアちゃん達と頑張りなよ!オーズ...」

ガッン!

「いて!?!」

いきなり何かが飛んできて、頭に当たった。

何だと思つてると、メダルが落ちていた。

しかも、ただのメダルじゃなかった…

コアメダルだった。

「なに…?これ…ライオンの…紋章?」

サンシャインが拾ってくれたのには、俺が持つてなかった、ライオンの紋章が刻まれていた。

まさか…

「サンシャイン!それを俺にくれ!」

俺が慌てて言うと、サンシャインはコアメダルを渡してくれた。

「ねえ!そのメダルって、もしかしてアナタの…?」

マリンがそう聞いてきたが、自分のかと言われるとちょっと違うので…
自信なく小さく頷いた。

「とりあえず…みんな、これはチャンスかもしれない……俺を信じ
てくれるか？」

俺がプリキュア達に対して、そう言つと…

一度は顔を見合わせていたりしたが、俺に向かってうなづいてくれた。

信じてくれる合図だった。

「ハハハ！カクレンボハオワリダ！」

「これであなた達も終わりです。」

「大人しく、命を差し出してもらおう…」

ちくしょ…あの三人も動き出したようだ…

こうなったら、腹くくってやるしかない！

「おや…仮面ライダーオーズ…そんな状態でやるのですか？」

「ハハッ！ヨホドシニタイヨウダナ！」

…緑のクワガタ、カマキリ、バッタのコンボは分身する事ができた。
だから、黄色のコンボも何かしらの効果があるはず！

俺はそれにかけるぜ！

俺は覚悟決めて、タカメダルとゴリラメダルをとりだし、ライオンメダルとトラメダルを入れる。

キュイン！キュイン！キュイン！

ティーン！ティーン！ティーン！

《ライオン！・トラ！・チーター！ラッタラッタラトラーター！！》

ライオンの頭…

トラの腕…

チーターの足…

新たなメダルを使って、俺は新たなコンボを生み出した。

野生に帰ったように感覚…

身体の芯が熱く燃えるような感覚、それが全身を支配した時、俺は本能で叫んでいた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

その瞬間、光が全てを包んだ。

メダル13 (後書き)

コンボきたー (^o^)

たまごのまほうせんせい！

メダル14 (前書き)

連続投稿＼(^-^)/

さあバトルラストパートです！

このまままだまだつつきるぜ！

メダル14

「コンボ？…それって分身したあれか？」

「ああ…同じタイプ、同じ色のメダルを使うと発動する。タトバコンボは特別でバランスをよくするコンボで、ガタキリバが分身だ。」

アंकはメダルを取り出して、タトバとガタキリバの組み合わせで、メダルを並べた。

「そしてコンボは他にもある…」

「他にもか…とりあえず、同じ色のような奴を集めればいいのか…種類ってのは？」

「種類ってのは…例えば、俺のメダルは鳥類…ウヴァのメダルは昆虫類…カザリのメダルは獣類…メズールのメダルは魚介類…ガメルのメダルは重量獣類と言ったように分かれている。」

「そうか…じゃあ種類別のメダルを三枚集めればコンボが使えて、より強力な力を使えるんだな。」

司紅がわかったように頷く。
アंकはそんな司紅を無視して、クワガタメダルだけを取ると、自分の腕だけ部分に取り込んだ。

「だが…俺の指示無しではコンボは使えな。」

「え？な、なんでだよ…コンボが使えれば、よりメダル集めを効率よく出来るだろ？」

「は！…お前だってわかってるだろ？コンボにはリスクが伴う事くらゐ…」

「そ、それは…」

司紅はあの、シヨッピングモールでの戦い、ガタキリバを使ったあと…実はかなり体力の限界がちかかったのだ。

それがあるから、コンボを使うとどうなるか、司紅は一応解っているのである。

「いいな…コンボは気安く使えない…もし、運がわるかったら…お前…死ぬかもな…」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

そんな話、関係がなかったように、俺はコンボを使った。

身体から熱が飛び出すような感覚……

それは巨大な光となってあたりを照らした。

「ナ、ナンダ！？コノヒカリハ！！！」

「く……これは……」

バチィ！バチィ！バチィィィィィィ！！

光はオオカミ怪人を包み込んで、火花を散らした。

「グアア!!」

「ぐああ!!」

「ぬっっっ!!」

そのまま、オオカミ怪人を吹き飛ばした。

その威力にプリキュア達も敵も、この俺も驚いた。

「す、凄い…威力…てか眩しい!」

ピーチが眩しそうに目つぶる。

こんな感じに (< | >)

他のプリキュアもオーズから放たれた閃光はに目をつぶっている。

こんな感じに (< | >)

「仮面ライダーオーズ…凄い…」

ただ一人、サンシャインだけが、オーズの光をきにしてなかった。
むしろより輝いているように見える。

「どうだ！これが俺の力だ！」

「ク…マダマダダ…オレタチヲナメルナ…！」

三体の怪人は再び素早いスピードで俺に襲いかかる。

「ただ…俺には見えてるぜ…
お前らの攻撃…！」

「ギーン！ギーン！ガギイイイ！ギイ！ギーン！ギーン！ガギイイイ
！ギイ！ギーン！ガギ！ギーン！ギーン！

「ぬ！我々の攻撃を全て止めた！？」

「へ！なめるなって事だぜ！」

「ダメレ！キサマハクロス！！」

カタコトのオオカミ怪人は怒り心頭のように、後ろから攻撃してくる。

だが、熱くなるのはいいが…ここには俺以外にも居るって事、忘れちゃ駄目だぜ！

「プリキュア！ラブサンシャインフレッーシュー！！」

「プリキュア！エスポワールシャワーフレッーシュー！！」

「プリキュア！ヒーリングフレアフレッーシュー！！」

ピーチ、青紫色のプリキュア、パインの攻撃が閃光のごとく迫る！

オオカミ怪人も気づいたようだが、もう遅い！

ドガアアアアアアン！！！！

「グアアア！！」

青い目のオオカミ怪人はそのまま吹き飛ばされる。

そして、勝機を見いだして、俺とサンシャインは動き出していた。

「よし！行くぜー！」

「マリン！ブロッサム！合体技いくよ！」

サンシャインが言うと、

ブロッサムとマリンは頷いて、立ち上がる。

「プリキュア！ゴールドフォルテバースト！！」

サンシャインは二人が立ち上がったのを確認し、タンバリンのような武器を出して、上に掲げた。

その上空には、まるで小さな太陽が出来ているようだった。

マリンとブロッサムも何かの武器を取り出した。

「プリキュア！フローラルパワーフォルテッシモー！！」

マリンには水色の、ブロッサムにはピンク色のエネルギーが、二人を包み込む。

そのまま、マリンとブロッサムは光の球体になり、サンシャインが出した太陽に突っ込む！

思わず俺は、味方の技に突っ込むのか！？と驚いてしまったが、これこそが…三人の合体技だったんだ。

二人はサンシャインの出した太陽に突っ込むと、光り輝く姿となって飛び出していた。

「プリキュア！シャイニングフォルテツシモ！！」

シャイニングフォルテツシモ…

やべ…かつこいいから見とれちゃった。

俺だって負けずに必殺技だ！

スキャナーを取り出して、勢いよくメダルをスキャンする。

《スキャニングチャージ！！》

スキヤニングチャージと言う軽快な音と共に、トラクローを出した。そのまま、オーズの前には黄色の丸い閃光が、一直線に道標のように現れた。

そして、そのまま一直線に走り出す！

輪っかを通り抜ける度に、スピードもパワーも上がってる。

「うおおおおああ！！」

「はああああああ！！」

二つの技が巨大な光となり、敵を打ち抜く！

ドガアアアアアアアアアアアアアア！！！！

「ぐぬあああ！！」

「ぬおあああ！！」

残りの怪人も大きな爆発と共に吹き飛んだ。

やったのか…？

「へへ…やったぜ…ざまあ…ぐ！」

フラツと身体がよろめいた。
ガタキリバの時と同じだ…
身体が鉛のように重い。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ちょっと！身体フラフラじゃないの！」

マリンとブロッサムが俺の方に駆け寄ってきてくれた。
心配してくれるのは嬉しいが…まずい…

このままじゃ変身が解けない…

仮面ライダーをやってる身としてはあまり正体はバラしたくない…

しかし、そんな心配をよそに残りのプリキュアのメンバーもこっちに集まってきた。
さらにピンチ！

「敵はどうなったの？二人共。」

「はい…実は消えてしまっていて…」

「あれは逃げられたわ…」

マリンとブロッサムは悔しそうに言う。

逃げられたのならしょうがない…

それに俺はこの状況をどうにかしないとまずい。

「あ、紹介が遅れました！キュアブロッサムです！今回はありがとうございます！
ついでに！」

「私もまだだったわね。私はキュアベリーよ！今回は助かったわ。」

二人は手を差し出してきた。

握手しないといけないが、手がプルプル震えてるぜ…

ツルツ

あ…

滑った時にはすでに遅く、ブロッサムとベリーに抱きつくようにもたれかかってしまった。

「にゃ!?!」

「きゃああ!エツチ!」

ドカツとベリーに突き飛ばされる俺。

ぐ!もうヤケクソだ!

突き飛ばされたまま、クルツと後ろを向いて、もうダッシュ!

「すみませんでしたあああああああああ…!」

プリキュア達が啞然とする中、俺はチーターのもうスピードでその場を後にした。

「…なんだっただんでしょ?」

「... KUS ...」

メダル14 (後書き)

まさかのオーズ逃走w

次からどうなるか！

メダル15（前書き）

これが連続コンボだ！

15を更新！

では皆さん新たな展開です！！

これからもよろしくお願ひします！

メダル15

「ぐ…おのれ…」

「私達が敗退とは…」

「ユルサネエ…アイツラ…」

プリキュア達とオーズとの戦いにより、ダメージを負ったケロベロスはある建物に逃げ込んでいた。

建物の奥に入ると、グリード達とダーク・デメスがいた。

「ケロベロスよ、帰ってきたか…どうだった？」

「はい…プリキュア達をおびき寄せる事には成功してたのですが、謎の戦士…オーズとかと言う奴らに邪魔されてしまって…」

ケロベロスの発言に、グリード達はざわついた。

特にウヴァはワナワナと拳を握っている。

「ふむ…プリキュア達をおびき寄せるつもりが…オーズまで釣れたか…まあいい…ケロベロスよお前達は怪我を癒やしてる。」

ケロベロスはダーク・デメスに敬礼をすると、その場から姿を消した。

「さて…オーズも出て来たと言う事は…どうやら、オーズも我としては邪魔な存在になる…これでお前達とは完全に協力する事になるな…」

「ええ…私達にも、オーズだけじゃなくプリキュアも邪魔になるからね。利害一致って事ね。」

メズールはガメルの頭を撫でながら答える。

カザリとウヴァも了承したように頷いた。

ガメルはよく分からないので首を傾げている。

「では…光の殲滅者とグリードはこれから共に結託しよう…」

「ぐ……あれ？ここは……俺の家？」

「ああ……やっと起きたか……」

目が覚めた俺は、身体をおこしながら当たりを見渡した。どうやら本当に俺の部屋のようだった。悲しいことに部屋の汚れもいつも通りだった……

「……もしかして……お前が運んでくれたのか？アंक？」

「ああ……感謝しろよ……全く……」

アंकはイライラしたように、アイスにかぶりつく。ちやっかりアイスだけは貰ってやがる……

「あ…それと…あの、ライオンのメダルありがとうな。あれのおかげで何とかなつたよ…」

「いや…あのメダルを投げたのは…この俺じゃない。」

「え？アंकじゃない？じゃあ、誰が渡したんだよ…」

「わからん…変なバイクに乗ったわけのわからん女だった…」

「女の人か…うーん…」

俺は考えながら、再び寝つ転がった。

女の人が誰かは分からないけど、今は身体を休ませたい気分だった
やっぱりコンボはそうとう疲れるようだ…

「言うておくが、ライオンのコアメダルも預かってからな…」

「はいはい…わかったよ……それで、プリキュアのみんなはどうなつた？」

「さあな…とりあえず…どこかに行っちまったぞ。」

「そうか……」

俺はまぶたが重くなった。
また眠気がきたようだ…

その頃、ミッドチルダでも新たな動きがあった。
なのは達は、何やら準備をしているようだ。

「さて、プリキュアのみんな…待たせてごめんね。遂に私達機動六課は、地球に身を奥事になったよ！」

「わーい！これで本格的に戦えますね！」

「はいはい。あんまりはしゃがないの、のぞみ。」

はしゃぐのぞみを、りんが抑える。

残りの女の子達も困ったように笑っている。

すると、機動六課組の方から、髪の高い女の子が出てくる。

「まあ、のぞみちゃんのやる気はありがたいよね！一緒に頑張る！」

「ありがとうー！スバルちゃん！」

二人は手を取り合ってブンブンと振り回してた。

その様子に、りと機動六課組のオレンジの髪の子もため息を
はいていた。

「りんは大変ね……」

「ティアナさんだって同じじゃないですか……」

オレンジ髪のティアナとりんは互いの苦勞をわかっているように肩を叩いていた。

そんな二人を、赤髪の男の子とピンク色の髪の女の子が慰めていた。

この中では一番年下だと思われる。

「エリオくとキャラコちゃんも、これからよろしくね！」

「はい！舞さんも皆さんもよろしくお願いします！」

「私達一生懸命頑張りますね！」

エリオとキャラコは純粹な笑顔を振りまいた。

そんな二人にプリキュア達も嬉しそうに笑いかけた。

「ほらほら！お前ら遊んでないでとつと船に乗るぞ！」

赤い髪をした女の子が荒い声で叫ぶ。

それに続いて、ピンク色のポニーテールの女性と白衣の女性、青い犬が船に乗り込もうとしていた。

上から名前はヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラと言う。

「全くヴィータちゃんはせっかちなな〜！ちゃんと行くのけっつい！してるんだから！」

「うるせ！のぞみ！さっさと乗れ！あと、私をちゃんづけで呼ぶな！お前より年上だ！」

ヴィータはガアアアと吠える。

フェイトとなのははそれを抑える。

のぞみはてへと頭を小突いた。

りんはのぞみの頭を叩いて、説教を開始した。

「ほな…まあ、とりあえず地球にいたら、滞在出来る場所が欲しいんやけど…結局、プリキュアみんなはどこを紹介してくるんや？」

はやてがそれを言うと、のぞみ達は顔を見合わせて、声を揃えて言った。

「ナッツハウスです！！！」

「パンパカパンの店じゃないラピ？」

「私達はもうパンを食べられないチヨピ？」

咲と舞の懐から、妖精のフラッピとチヨッピが悲しそうに喋った。

ちなみに咲と舞がプリキュアに変身出来るのはこの二人のおかげである。

「いや…流石にパンパカパンはまずいでしょ…」

「まあまあ…ちゃんと帰るから大丈夫よ。」

咲と舞が二人を慰めて、思わずみんな笑ってしまうのであった。

「まあそんな事で…とりあえず、私達の目的は…あの怪人達…そして、オーズと腕だけの存在の人？だね。」

なのはの言葉にみんなが頷いた。

「じゃあ！地球に向かって出発だ！」

「やあ！どうだった？オーズの活躍は！」

「そうですね…まあかなり良かったと思いますよ。」

そんなころ、ある場所では、鴻上会長と司紅にライオンメダルを渡した謎の女性が喋っていた。

「そうか！君がそう言うならかなりの事だ！」

「あゝありがとうございます！で、鴻上さん、例の物はもう出来てますか？」

女性は何かをねだるように手を差し出していた。
鴻上会長は困ったように顔を歪めた。

「すまない。まだバーストドライバーはちょっと調整が必要なんだ！
もうちょっと待ってもらえるかい？」

それを言うと女性は口を尖らせて、うーと唸る。

「まあいいです。その間はオーズ君達の様子でも見てますよ。」

「そうか！では頑張りたまえ！君の目標の為にね！」

「はい！鳥川 諒子頑張らせていただきますね！」

諒子となる女性はウィンクをしてガッツポーズをとった。

メダル15 (後書き)

さあどうなるか！楽しみにしてくださいね！

メダル16（前書き）

16を投稿しました！

新たな展開です！
楽しんでくださいね！

メダル16

「さて…学校に行くか。」

「あん？学校だあ？」

荷物をまとめ、バックをせよい、学生服を来て準備をする。

オーズをやっている俺こと、松原 司紅ではあるが、一般的な学校に通う男子高校生なのである。

だから、学校に行く為に準備しているのに、何故そんなにお前ににらまれなきゃいけないんだよアंक。

「言うておくが、学校には入れないからな…不法侵入になるぞ。」

「ばかか…そんな事はわかってる…ただメダル集めの事はわかってるんだよな？司紅…」

「はいはい…わかったよ…じゃあ行ってきまーす！」

扉を思いっきり開けて外に飛び出した。
色々あったけど、やっぱり学校に行くからには楽しまないとやって
いけないと思った。

ちなみに俺の学校に行くには電車を使っている。

家から十分ぐらいで駅につき、そこから二駅ぐらいに学校駅前に到
着。

ちよつと歩いて、学校につく。

「なんか…久しぶりに学校に来た感じだな…」

俺はそんな事を思いながら、同じように通ってる生徒達とおんなじ
ようにげた箱を入れていく。

「よう！司紅！休みあけなんかあったか？」

教室に入ると、一人の男が俺の所に駆け寄ってくる。

その男は俺の友達で、大澤　一ノ助おおさわ かずのすけと言っ名前だ。

俺はカズと呼んでいる。

かズのすけじゃ長いしな。

「何だよカズ。俺は休み中はいつも通りダラダラしてたよ。」

「そっか！ならまあいいさ。それより知ってるか！？プリキュアがでただぜ！」

「ああ…まじか。」

俺はとりあえず普通に言葉を返す。

まさか俺が生でプリキュアにあってプリキュア布団にあって鼻血をたらしたとは思わないだろ。

ちなみに、他の学校では分からないが、俺の学校では、プリキュア達はかなりアイドル扱いになっている。

うちのクラスでも、どのプリキュアが一番好きか決めていたりする。ほとんど男子だけ…

カズもそのうちの一人である。

「いや〜！プリキュアは最高だよな！可愛くて強くて…で、やっぱり最高はムーンライトとパッションだよな〜！」

残念だったなカズ…俺はじかにあって布団になってもらったよ（＾
ー＾）

なんかちよつと優越感だな…

「ちなみにお前は誰がいいんだよ！司紅だけだぜ？決めてないの〜」

そう言つてカズはプリキュアのパンフレットを取り出して、俺にみせてきた。

ちなみにパンフレットは写真や新聞記事などを切り取って貼り付けて作った物だ。

ちやかっり他の生徒に売ったりしているあたりすごいな…

「俺はわからないよ…確かにみんな可愛いが…そう簡単に決められないぜ…」

「ははは！まあそりゃそうだ！決めたら言ってくれよ。写真売ってやるから！」

おいカズ…あげるじゃなくて売るのがよ…
本当にちやかっりしてやがる。

「そういえば…今回はプリキュアだけじゃなかったぜ！なんか、謎の人物が現れたんだ！…一説だと……仮面ライダーだって…」

ふ…どうやら俺も有名になったもんだ…新聞にのるぐらいに有名って嬉しいな。

まあ正体は分からないと思うが…

「司紅…確か仮面ライダーってあれだろ？風都とか言う街で現れたり、ちよつと昔で東京に現れたって言う未確認生命体第四号の事などの名称だよな？他にもあるけど…」

「まあそうなんじゃないか？仮面ライダーらしい見た目だそうだからな…」

俺は普通にうけながしながらも、仮面ライダーと名乗ったのは、カズの言った事が関係していると思っていた。

仮面ライダーと言うのは、都市伝説らしいものだが、意外と多く知れ渡っていて、悪と戦う正義のヒーローと言われている。

だから、あのオオカミ怪人達と戦う時、俺は思わず仮面ライダーと名乗ってしまったのである。

そして、そんな感じで話をしていると、先生が入ってきた。カズと俺は話をやめて、自分の席につきはじめる。

「さて…ホームルームをはじめるぞ…ああ、あと先に言っておくが、今日はラクロス部の練習試合があって、他校の生徒が来たり、観客もくると思っからちゃんと言に入れておけよー！」

先生がそう言うと言んなが返事をする。

そうか…今日はラクロス部の試合があるのか…
そういえばラクロス部の奴らかなり気合い入ってたな…

「司紅どうすんの？ラクロスの試合見に行くか？他校の女の子達とうちのラクロス部の女の子達の戦いだせ？」

「まあそうだよな…うーん…暇だったら見に行くわ。」

「了解！じゃあ行く時には言ってくれよ。」

そう言っただけで肩を叩いて席に戻るカズ。

まあラクロス部の奴を見るのも悪くはないよな…意外とスポーツを見るのは好きだし…

ラクロス部の連中にも誘われたりしてたしな…

そんな感じで授業が始まった。

今日からいつも通りの生活…

でも、オーズとしてこれからどうするかと考えないとな…

とりあえず…メダルの組み合わせでも考えるか…

「よし！今日のラクロスの試合、絶対負けられないよ！！」

その頃、一人の少女がある部屋にいた。
授業中らしいが、何かラケットやらボールやらを整理していた。

「あ…授業始まったか…まあ全部終わらせたら行くか…ふふ…楽しみだな…」

少女はニコニコと笑っている。
よほど嬉しそうな事があるんだろう。

ガチャリ…

「ん？誰？」

そんな時、部屋の扉が開いた。
そこには男が立っている。

「あの?…誰ですか?」

少女が訪ねると、男はニヤリと笑いながら少女に近づいた。

そして、懐から…銀色のメダルを取り出した。

「お前の欲望…解放しろ…」

チャリン

「え…?きゃああああ!」

彼女から、あるものが入り、そして生み出した。

ヤミーを…

少女はそのまま気を失った。

男はメダルが身体を覆い尽くした時、真の姿となった。

「さあ…メダルをドンドン集めるよ…ヤミー…」

拳を握りしめ、ウヴァがそう呟いた。

メダル16 (後書き)

ではまた次回！

次はどつなるやら／(^ー^)
／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4569r/>

伝説とメダルと魔法～新たな戦い

2012年1月11日01時53分発行